

海外食料需給レポート

(Monthly Report : 3 月)



平成 2 7 年 3 月 3 1 日

農林水産省

目次

【利用上の注意】	
----------------	--

概要編

1 2014/15年度の国際的な穀物需給の概要	1
2 2014/15年度の国際的な油糧種子需給の概要	2
3 各国における輸出規制の動き	3
(資料)	
1 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	4
2 穀物等の国際価格の動向（グラフ）	5
3 平成26年7月以降の食品小売価格の動向	6
4 世界の小麦生産量と輸出量/日本の輸入量	7
5 世界のとうもろこし生産量と輸出量/日本の輸入量	8
6 世界の大豆生産量と輸出量/日本の輸入量	9

品目別需給編

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要	1
(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア 米国	2
イ カナダ	3
ウ 豪州	4
エ EU	5
オ 中国	6
カ インド	7
キ ロシア	8
ク ウクライナ	9
ケ カザフスタン	10
コ アルゼンチン	10

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要	11
(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア 米国	12
イ 中国	14
ウ アルゼンチン	15
エ ブラジル	16
オ EU	17
カ ウクライナ	18

3 大麦

(1) 国際的な大麦需給の概要	19
-----------------------	----

(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア 豪州	20
イ カナダ	20
ウ 米国	21
エ ウクライナ	21
オ EU	21
カ ロシア	21

4 米

(1) 国際的な米需給の概要	22
(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア インド	23
イ タイ	24
ウ ベトナム	25
エ 中国	26
オ 米国	26
カ フィリピン	27
キ インドネシア	27
ク ブラジル	27
ケ 豪州	27

II 油糧種子

1 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要	28
(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア 米国	29
イ ブラジル	30
ウ アルゼンチン	30
エ パラグアイ	32
オ カナダ	32
カ 中国	33

2 なたね

(1) 国際的ななたね需給の概要	34
(2) 主要生産・輸出国等の需給状況	
ア カナダ	35
イ 豪州	35
ウ ウクライナ	36
エ EU	36
オ 中国	37

今月のトピックス

・ブラジルのバイオエタノールの現状と見通し	1
-----------------------------	---

表紙の写真：ブラジル中西部 ブラジリア近郊（2015年3月14日）
収穫期の大豆畑と栄養生長期の冬とうもろこし畑

【利用上の注意】

海外食料需給レポート（Monthly Report）は、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

- **海外食料需給レポート（Monthly Report）で使用している統計数値は、主に米国農務省が2015年3月中旬までに発表した情報を引用しています。**

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 <http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>
「Grain：World Markets and Trade」 <http://usda.mannlib.cornell.edu/MannUsda/viewDocumentInfo.do?documentID=1487>
「Oilseeds：World Markets and Trade」 <http://usda.mannlib.cornell.edu/MannUsda/viewDocumentInfo.do?documentID=1490>
「World Agricultural Production」 <http://usda.mannlib.cornell.edu/MannUsda/viewDocumentInfo.do?documentID=1860>
「PS&D」 <http://www.fas.usda.gov/psdonline/psdquery.aspx>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場(平成27年3月中において適用される)等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<http://www.fas.usda.gov/psdonline/psdAvailability.aspx>
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「海外食料需給レポート（Monthly Report）」）を併記願います。
資料内に掲載されている写真については、特に断りがある場合を除き、著作権は農林水産省に属するものとします。

○ 各品目の世界の需給表掲載国については、米国農務省の需給報告が新年度に切り替わる5月時点で、各項目別に過去3年平均の上位7カ国を選定し記載しています。

○ 本レポートの電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 海外食料需給レポート

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 **農林水産省大臣官房食料安全保障課**
TEL : 03-3502-8111 (内線3805)
FAX : 03-6744-2396

本文中の略称について

FAO	国連食糧農業機関
IGC	国際穀物理事会
USDA	米国農務省
AAFC	カナダ農務農産食品省
ABARES	豪州農業資源経済科学局
CONAB	ブラジル食料供給公社
MAGyP	アルゼンチン農牧漁業省

世界各国の穀物等の作付・生育状況、作柄等の食料需給に関する情報提供を目的として、農林水産省食料安全保障課公式フェイスブック「海外食料需給インフォメーション」を開設しました。

「海外食料需給インフォメーション」

<https://www.facebook.com/zyukyu.jouhou>



概要編

1 2014/15年度の国際的な穀物需給の概要
 <米国農務省の見通し>

○2014/15年度の穀物需給（予測）のポイント

穀物全体の生産量は前年度より増加して24.7億トンとなり、消費量24.6億トンを上回る見込み。

この結果、期末在庫量は前年度に比べ増加し、期末在庫率も20.9%と上昇する見込み。

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

世界の穀物全体の生産量は、大麦、米で減少するものの、小麦、とうもろこしで増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。

品目別には、小麦は、カナダ、米国、豪州で減少するものの、収穫面積の増加や単収の上昇等により、EU、ロシア、中国等で増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。とうもろこしは、ブラジル、アルゼンチンで作付面積の減少、中国、ウクライナで単収低下等により減少するものの、収穫面積の増加等により、EU、米国等で増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。大麦は、収穫面積の減少や単収の低下から、トルコ、カナダ、豪州等で減少し、前年度を下回る見込み。米は、中国等で増加するもののインドで減少し、世界全体では前年度を下回る見込み。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界の穀物全体の消費量は、小麦、とうもろこし、大麦、米で増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。

品目別には、小麦は、飼料用需要が米国で減少するものの、EU、中国等で増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。とうもろこしは、飼料用需要が米国、中国等で増加することから、史上最高となった前年度を上回る見込み。米は、中国、インドネシア等の需要増から増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑

世界の穀物全体の貿易量は、大麦、米で増加するものの、小麦、とうもろこしで減少することから、3.6億トンと前年度を下回る見込み。

品目別には、小麦は、米国、カザフスタン等の減少により、とうもろこしは、米国、アルゼンチン等の減少により、輸出量はそれぞれ前年度を下回る見込み。米は、パキスタン、ベトナム等で増加することから、輸出量は前年度を上回る見込み。

【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

世界の穀物全体の期末在庫量は、生産量が消費量を上回ることから、前年度より増加して5.1億トンとなり、期末在庫率も20.9%と上昇する見込み。

表－1 世界の穀物需給

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量					
穀物計	2,266.8	2,473.8	2,474.7	▲ 0.4	0.0
小麦	658.5	716.10	724.8	▲ 0.3	1.2
粗粒穀物	1,136.3	1,280.7	1,275.0	▲ 0.5	▲ 0.4
(とうもろこし)	868.0	989.6	989.7	▲ 1.6	0.0
(大麦)	129.8	145.5	140.7	0.5	▲ 3.3
米	472.0	477.1	474.9	0.3	▲ 0.5
消費量					
穀物計	2,284.2	2,423.6	2,462.9	3.1	1.6
小麦	679.8	704.2	714.5	▲ 0.1	1.5
粗粒穀物	1,135.7	1,238.6	1,264.7	2.7	2.1
(とうもろこし)	864.5	953.1	976.5	1.1	2.5
(大麦)	131.7	141.3	142.3	1.0	0.7
米	468.7	480.8	483.7	0.6	0.6
うち、飼料用					
穀物計	805.7	866.4	902.7	2.7	4.2
小麦	137.1	130.6	140.1	0.4	7.3
粗粒穀物	668.6	735.8	762.6	2.3	3.6
(とうもろこし)	517.7	573.1	597.2	1.6	4.2
(大麦)	89.0	97.1	95.9	0.6	▲ 1.2
米	...	...	...	...	...
貿易量					
穀物計	299.6	371.8	359.0	4.4	▲ 3.4
小麦	137.4	165.8	160.6	0.5	▲ 3.1
粗粒穀物	122.9	163.8	155.8	3.6	▲ 4.8
(とうもろこし)	95.2	130.4	116.8	1.7	▲ 10.4
(大麦)	19.6	22.9	25.9	1.8	12.9
米	39.4	42.3	42.6	0.4	0.7
期末在庫量					
穀物計	452.4	502.7	514.4	▲ 5.7	2.3
小麦	175.6	187.5	197.7	▲ 0.1	5.5
粗粒穀物	166.7	208.7	219.1	▲ 5.0	5.0
(とうもろこし)	135.7	172.1	185.3	▲ 4.4	7.6
(大麦)	20.8	24.9	23.4	▲ 0.6	▲ 6.3
米	110.2	106.5	97.6	▲ 0.6	▲ 8.3
期末在庫率					
穀物計	19.8%	20.7%	20.9%	▲ 0.3	0.1
小麦	25.8%	26.6%	27.7%	▲ 0.0	1.0
粗粒穀物	14.7%	16.9%	17.3%	▲ 0.4	0.5
(とうもろこし)	15.7%	18.1%	19.0%	▲ 0.5	0.9
(大麦)	15.8%	17.7%	16.4%	▲ 0.5	▲ 1.2
米	23.5%	22.1%	20.2%	▲ 0.1	▲ 2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」(10 March 2015)

注：期末在庫率の「前月予測からの変更」と「対前年度増減率」は、前月予測及び前年度とのポイント差である。

2 2014/15年度の国際的な油糧種子需給の概要
 <米国農務省の見通し>

○2014/15年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は、前年度より増加して5.3億トンとなり、消費量5.1億トンを上回る見込み。

この結果、期末在庫量は前年度に比べ増加し、期末在庫率も20.4%と上昇する見込み。

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界の油糧種子全体の生産量は、大豆、なたねの増加により、前年度を上回る見込み。

品目別には、大豆は、収穫面積の増加や単収の上昇により米国、ブラジル等で増加し、史上最高となった前年度を上回る見込み。なたねは、EU、中国、ロシア等で増加し、前年度を上回る見込み。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界の油糧種子全体の消費量は、堅調な搾油需要から、前年度を上回る見込み。

品目別には、大豆は、中国、アルゼンチン等で搾油用の需要増等から、前年度を上回る見込み。なたねは、EU、カナダ、米国等で増加することから、前年度を上回る見込み。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界の油糧種子全体の貿易量は、前年度を上回り1.4億トンとなる見込み。

品目別には、大豆は、生産量の増加に伴う米国の輸出増から、前年度を上回る見込み。一方、なたねは、カナダ、豪州等で減少することから、前年度を下回る見込み。

【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界の油糧種子全体の期末在庫量は、前年度より増加して1.0億トンとなり、期末在庫率は20.4%と上昇する見込み。

表－2 世界の油糧種子需給

(単位:百万トン)

年 度		2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
				予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	油糧種子計	475.8	504.3	532.2	0.1	5.5
	うち、大豆	268.8	283.7	315.1	-	11.0
	なたね	63.8	71.2	71.3	0.1	0.2
	綿実	46.5	45.4	45.0	0.0	▲ 0.7
	ピーナッツ	40.1	39.8	39.0	-	▲ 2.2
	ひまわり種	36.0	42.9	39.8	▲ 0.1	▲ 7.3
消費量	油糧種子計	469.1	490.2	505.6	0.1	3.1
	うち、大豆	261.2	273.0	288.5	▲ 0.0	5.7
	なたね	65.4	69.4	70.7	0.1	1.9
	綿実	47.1	45.4	45.3	0.1	▲ 0.2
	ピーナッツ	39.1	39.3	38.9	0.0	▲ 1.1
	ひまわり種	35.6	41.8	40.1	▲ 0.1	▲ 4.1
うち、 搾油用	油糧種子計	397.0	418.2	431.9	▲ 0.2	3.3
	うち、大豆	230.2	240.9	254.2	▲ 0.3	5.5
	なたね	62.4	66.4	67.7	0.1	2.0
	綿実	34.6	34.2	34.1	0.1	▲ 0.3
	ピーナッツ	17.3	17.5	17.3	-	▲ 0.9
	ひまわり種	32.0	38.1	36.7	▲ 0.1	▲ 3.9
貿易量	油糧種子計	118.1	134.1	136.8	0.3	2.0
	うち、大豆	100.5	113.0	117.4	0.2	3.9
	なたね	12.5	15.1	13.9	0.1	▲ 7.9
	綿実	0.9	0.9	0.7	▲ 0.0	▲ 27.5
	ピーナッツ	2.6	2.9	2.6	0.0	▲ 8.7
	ひまわり種	1.4	2.0	2.1	-	2.5
期末在庫量	油糧種子計	69.6	80.5	103.3	0.2	28.3
	うち、大豆	57.4	66.3	89.5	0.3	35.0
	なたね	5.1	6.7	7.2	0.0	7.7
	綿実	1.6	1.6	1.4	0.0	▲ 9.6
	ピーナッツ	2.4	2.3	2.2	▲ 0.1	▲ 7.3
	ひまわり種	2.6	3.3	2.7	-	▲ 17.0
期末在庫率	油糧種子計	14.8%	16.4%	20.4%	0.0	4.0
	うち、大豆	22.0%	24.3%	31.0%	0.1	6.7
	なたね	7.8%	9.7%	10.2%	0.0	0.6
	綿実	3.5%	3.5%	3.1%	0.0	▲ 0.3
	ピーナッツ	6.2%	5.9%	5.5%	▲ 0.1	▲ 0.4
	ひまわり種	7.4%	7.9%	6.8%	0.0	▲ 1.1

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「Oilseeds: World Markets and Trade」、「PS&D」(10 March 2015)

注: 期末在庫率の「前月予測からの変更」と「対前年度増減率」は、前月予測及び前年度とのポイント差である。

3 各国における輸出規制の動き（2015年3月現在）

2010年8月のロシアの干ばつによる小麦等の輸出禁止措置以降、これに追隨して旧ソ連諸国等が穀物の輸出規制を実施したが、2011年に入り穀物の生産が回復してきたこともあり、当該規制措置を緩和する動きが顕著となった。

主な輸出国における輸出規制の状況

2010年8月5日、ロシアのプーチン首相は、干ばつによる穀物の減産から8月15日以降の小麦、大麦等の穀物の輸出禁止を決定した。これに続き、旧ソ連諸国では、ウクライナが2010年10月19日以降、小麦等の穀物の輸出割当を導入し、カザフスタンも油糧種子の輸出を禁止した。

2011年に入り、干ばつ等からの回復による小麦・大麦の単収向上による穀物生産量の回復が見込まれたこと等から、ロシアは穀物の輸出禁止措置を2011年7月1日から解除した。ウクライナにおいても、小麦・とうもろこしの豊作が見込まれたことから、2011年10月22日より、これらに係る輸出税を廃止。大麦についても当初期限通り2012年1月に廃止された。

インドにおいても、小麦の生産量が史上最高の87百万トンとなることが見込まれる中で米や小麦等の穀物在庫が積み上がり、備蓄スペースの問題が深刻化。このため、2011年9月8日、4年にわたる小麦及び米（非パスマティ米）の輸出禁止措置を解除し、輸出枠を設定。

アルゼンチンでは、輸出規制に対して生産者や穀物輸出業者の反対が強いため、各年度の作況を踏まえつつ輸出枠数量を調整。

2012/13年度は、ロシアやウクライナで乾燥被害等による穀物の大幅減産が見込まれ、ウクライナでは2012年10月24日に農相が「11月15日から小麦の輸出は禁止されるだろう」と発言したが実施はされなかった。ロシアでは農相が2012年11月7日の「穀物の国家備蓄在庫売却に関する作業部会」で穀物輸出の制限は不適と言明。一方、アルゼンチンでは2012年6月に2012/13年度小麦の輸出枠を600万トンに設定したが、国内需給を満たすため12月に450万トンに下方修正。

2013/14年度は、アルゼンチンがとうもろこしの増産見込みを受け、当初から輸出枠を1,600万トンと多めに設定。また、小麦については2012/13年度に輸出枠を下方修正した経験を踏まえ、輸出枠を150万トンに設定し、2014年1月13日、2月28日、4月27日にそれぞれ50万トンずつ段階的に輸出を許可した上で、10月22日に輸出枠を50万トン追加して合計200万トンに拡大。

2014/15年度は、アルゼンチンが2014年11月にとうもろこし800万トン、小麦150万トンの輸出枠を設定。2014年12月、2015年2月にそれぞれ小麦の輸出枠を100万トン追加し、合計350万トンに拡大。

なお、ロシアは、2014年12月25日、原油価格の下落、ウクライナ情勢に基づく経済制裁等を背景にルーブルが下落し、ドル建て取引の穀物輸出が進むとともに、国内価格が上昇し、政府買入在庫の積み増しも困難になったため、2015年2月1日～2015年6月30日の予定で、小麦に輸出税（15%＋7.5ユーロ／トン。ただし、35ユーロを下回らない。）を導入することを政府決定。

<2010年8月以降の輸出規制等の主な動き>

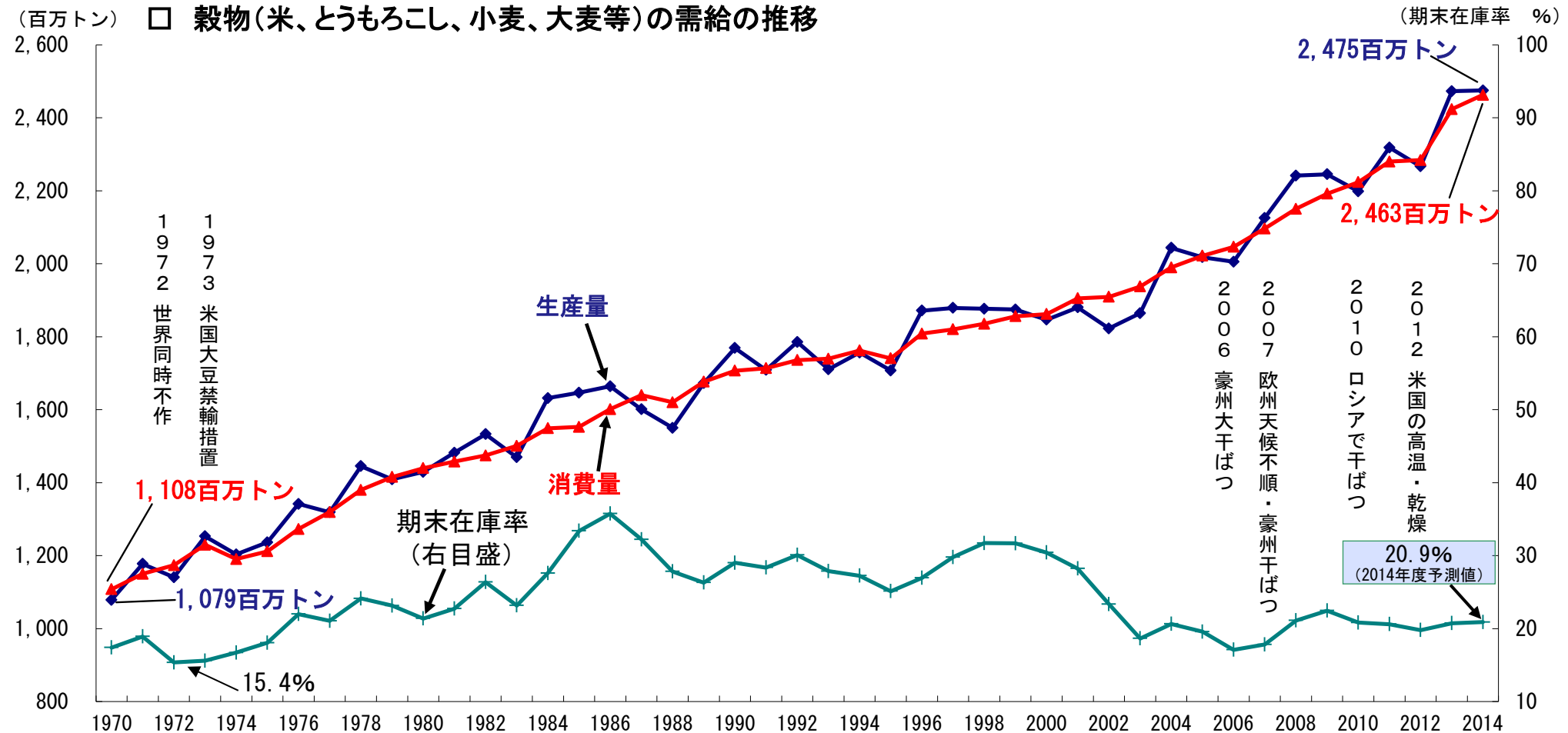
- ◇ ロシア : 小麦、大麦、とうもろこし等の穀物の輸出禁止措置を実施(2010年8月15日～2011年6月30日)。
小麦に輸出税を賦課(2015年2月1日～2015年6月30日)。
- ◇ ウクライナ : 小麦、大麦、とうもろこし、ライ麦、そばの輸出割当を実施(2010年10月19日～2011年6月30日)。
とうもろこしは2011年5月5日、小麦・大麦は2011年6月3日にそれぞれ規制廃止。
: 小麦、大麦、とうもろこしに輸出税を賦課(2011年7月1日～2012年1月1日)。10月22日から小麦及びとうもろこしの輸出税を廃止。
- ◇ インド : 小麦、米（非パスマティ米）の輸出禁止措置を解除し、それぞれについて200万トンの輸出枠を設定（2011年9月8日）。
2012年2月7日、非パスマティ米の輸出枠を400万トンに引き上げ。
- ◇ アルゼンチン : 2012/13年度の小麦の輸出枠を2012年6月に600万トンに設定。その後、12月に450万トンへ下方修正。
2012/13年度のとうもろこしの輸出枠を2012年7月に1500万トンに設定。その後、2013年3月及び9月の2回に分けて輸出枠に計500万トン追加し、合計2000万トンに拡大。
2013/14年度のとうもろこしの輸出枠を2013年6月に1600万トンに設定。
2013/14年度の小麦の輸出枠を150万トンに設定した上で、2014年1月、2月、4月にそれぞれ50万トンずつ段階的に輸出許可。その後、10月に輸出枠に50万トン追加して合計200万トンに拡大。
2014/15年度のとうもろこしの輸出枠を2014年11月に800万トンに設定。輸出許可は来年3月15日以降。
2014/15年度の小麦の輸出枠を2014年11月に150万トンに設定。その後、2014年12月と2015年2月にそれぞれ100万トンを追加し、合計350万トンに拡大。

資料：I G C (国際穀物理事会)、各国政府公表資料等による。

注：なお、青字は輸出規制の緩和措置

資料 1 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い、1970年に比べ2.2倍の水準に増加している。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2014/15年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回り、20.9%と2013/14年度（20.7%）に比べ上昇する見込み。



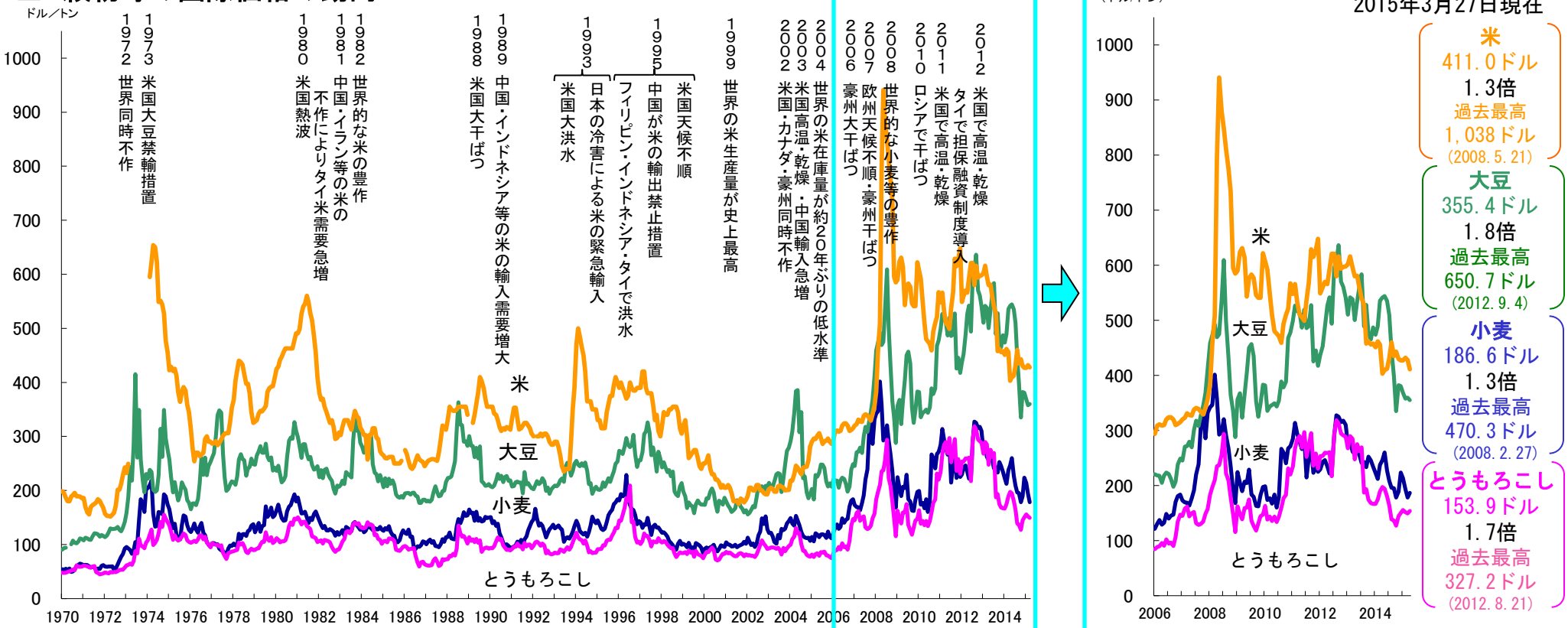
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2015)、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」

(注) なお、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」については、公表された最新のデータを使用している。

資料2 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- 穀物等の国際価格は、2012年の高値から大きく値を下げたものの、現在でも、2006年秋頃に比べ依然として1.3～1.8倍の水準。
- ・ 2012年6月以降の米国の高温・乾燥の影響から、とうもろこしは、8月に史上最高値（327.2ドル/トン）、大豆は、9月に史上最高値（650.7ドル/トン）。2013年7月以降、とうもろこし・大豆共に、米国産の豊作見込みから低下していたが、2014年2月以降、堅調な輸出需要や南米の大豆の作柄懸念から上昇。小麦は、2012年6月以降、とうもろこしに追随して上昇。その後低下したものの、2014年2月以降、米国での乾燥・凍害懸念等から上昇。2014年5月以降、とうもろこし・大豆は、米国の順調な生育、小麦は、世界在庫量が潤沢なこと等から共に低下したが、2014年10月以降、米国、黒海沿岸の凍害懸念等によりやや上昇。
 - ・ 米は、タイで担保融資制度の再導入等により上昇していたが、2013年7月以降、安価なインド産等への輸出需要のシフトやタイで担保融資制度の見直しの動き等から低下。2014年5月以降、タイ政府による輸出停止により上昇。

□ 穀物等の国際価格の動向



注：小麦、とうもろこし、大豆は、各月ともシカゴ商品取引所の第1金曜日の期近価格（セツルメント）である。
米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注1：各月第1金曜日（米は第1水曜日）に加え、直近の最終金曜日（米は最終水曜日の価格）を記載。
注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近価格（セツルメント）の最高価格。
注3：図中の倍率は2006年秋頃と比較した直近の価格水準。

資料3 平成26年7月以降の食品小売価格の動向

○ 平成26年4月に消費税率の引上げがあったものの、国内の食品小売価格は大きな値動きはなし。
 なお、現時点では円安が国内の食品小売価格に及ぼす影響は限定的。

平成26年7月～平成27年2月の食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)											
	H24	H25	H26						H27		
品目	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (2月/24平均)
生鮮食品を 除く食料	99.7	99.6	103.8	103.8	103.9	104.0	104.0	104.0	104.2	104.3	4.6%
食パン	100.8	99.9	102.7	103.0	102.9	102.5	102.3	102.4	102.2	102.1	1.3%
即席めん	99.2	98.7	102.4	101.8	101.3	101.6	101.2	101.1	104.4	107.5	8.4%
豆腐	96.7	95.1	99.5	99.5	99.8	100.0	99.9	99.9	100.1	100.1	3.5%
食用油 (キャノーラ油)	99.7	100.2	100.5	99.7	100.3	100.1	98.5	98.2	98.2	98.3	-1.4%
みそ	98.3	96.3	97.8	97.7	97.2	96.9	96.7	96.5	97.4	97.4	-0.9%
チーズ	97.0	95.5	108.9	109.9	110.8	110.0	110.1	110.0	108.7	107.8	11.1%
バター	103.8	105.0	111.1	111.6	112.1	112.4	112.5	111.4	111.8	112.0	7.9%
マヨネーズ	96.8	100.1	109.5	108.5	107.1	107.4	108.8	107.6	108.9	107.3	10.8%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成22年の平均値を100とした指数で表記している。

注2: 平成27年2月の調査結果は総務省が平成27年3月27日に公表したもの。

【参考】平成26年12月～平成27年2月の食品小売価格の動向(速報値)

食品価格動向調査(農林水産省)							
	H24	H25	H26	H27			
品目	平均	平均	12月	1月	2月	上昇率 (2月/1月)	上昇率 (2月/24平均)
食パン	97.6	96.2	99.6	99.6	99.6	0.0%	2.0%
即席めん	107.4	106.6	109.6	114.4	117.1	2.4%	9.0%
豆腐	101.5	99.3	102.9	103.1	103.1	0.0%	1.6%
食用油 (キャノーラ油)	90.8	91.2	89.3	89.9	89.5	-0.4%	-1.4%
みそ	118.0	117.2	120.2	120.7	121.0	0.2%	2.5%
チーズ	113.0	111.0	128.5	127.9	128.9	0.8%	14.1%
バター	106.0	107.6	114.9	115.3	114.9	-0.3%	8.4%
マヨネーズ	99.6	103.7	110.9	111.4	111.3	-0.1%	11.7%

資料: 農林水産省加工食品小売価格調査

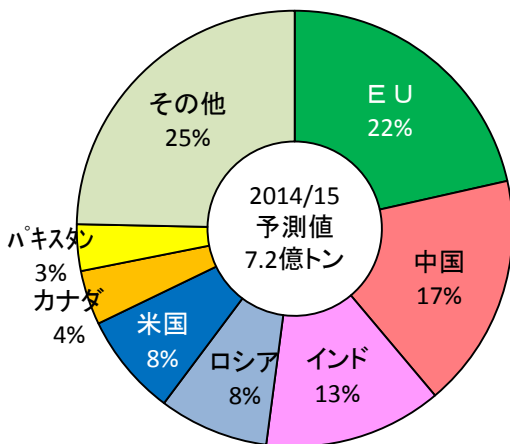
注1: 平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年5月の価格を100とした指数で表記している。

注2: 調査結果は毎週調査の平均値で算出。

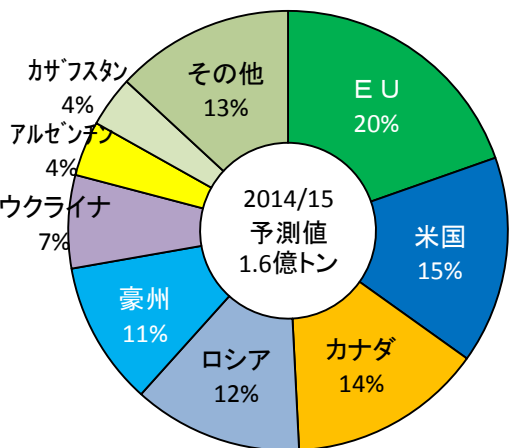
注3: マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。

資料4 世界の小麦生産量と輸出力/日本の輸出入量(2015年3月現在)

世界の小麦生産量

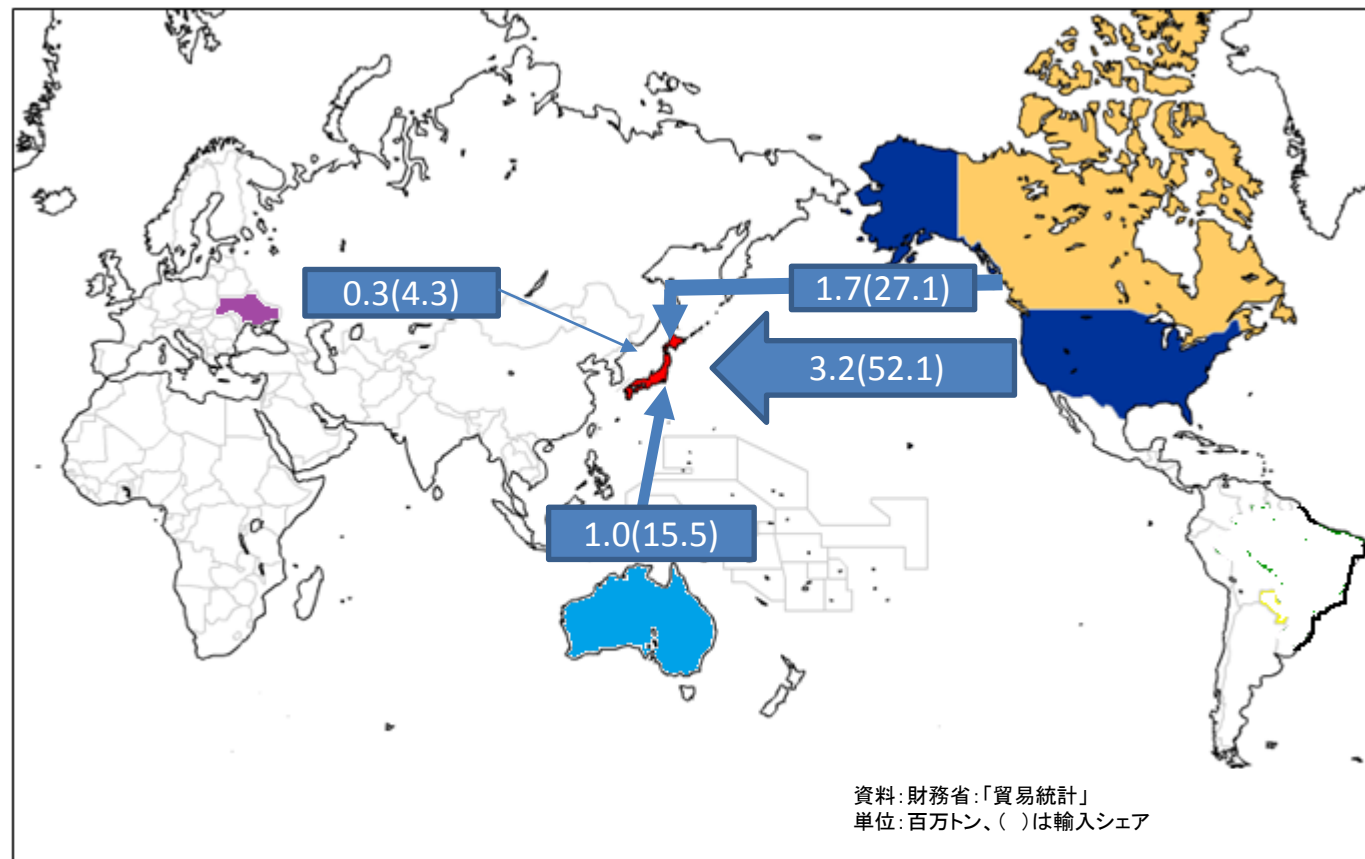


世界の小麦輸出力



資料: USDA「PS&D」

日本の国別小麦輸入量(2013年)



<参考>世界の小麦輸入国 (2014/15)

—世界輸入量全体の32%を上位7カ国が、残る68%を111カ国が占める—

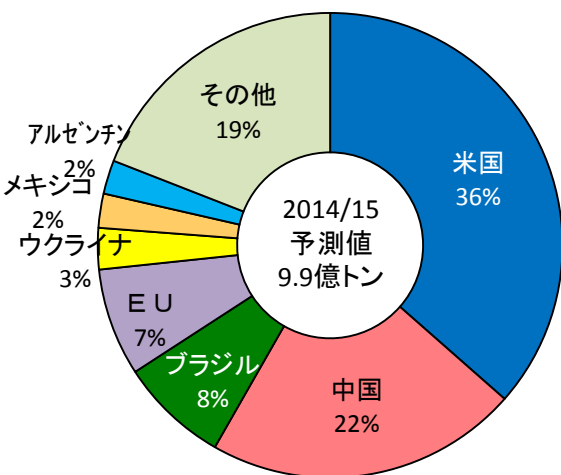
(単位: %)



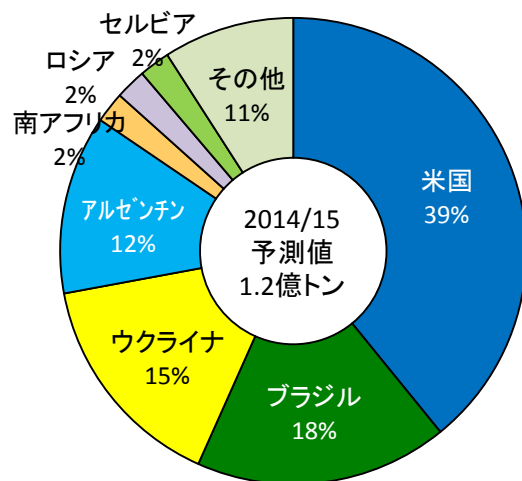
日本の小麦生産量
2013年: 81.2万トン
2014年: 84.9万トン
(資料: 農林水産統計)

資料5 世界のとうもろこし生産量と輸出量/日本の輸入量(2015年3月現在)

世界のとうもろこし生産量

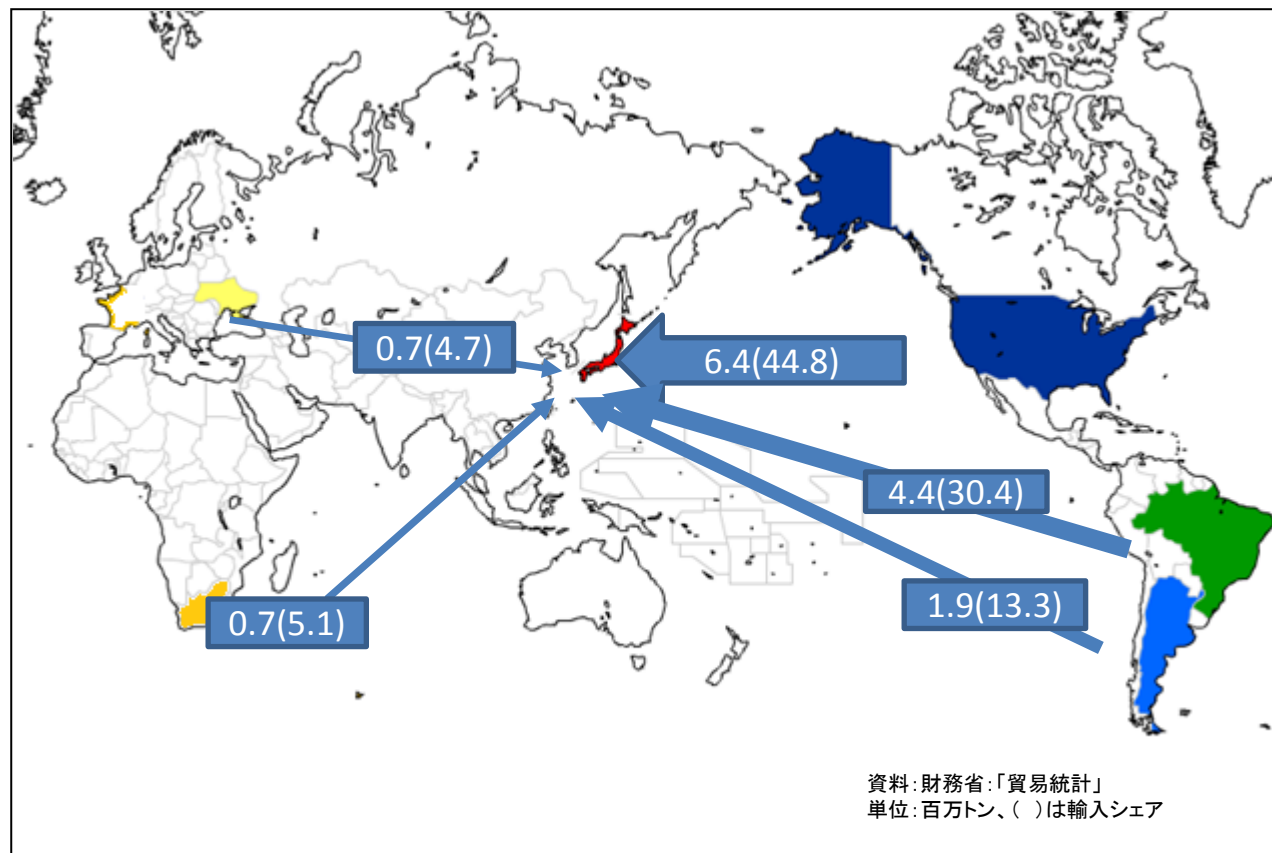


世界のとうもろこし輸出量



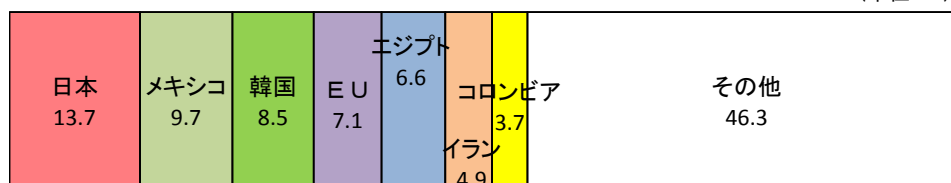
資料: USDA 「PS&D」

日本の国別とうもろこし輸入量(2013年)



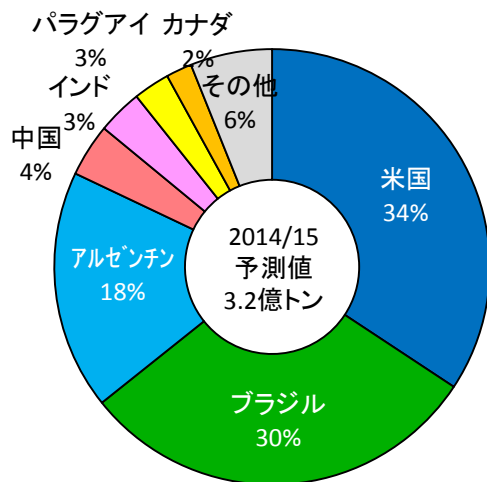
＜参考＞世界のとうもろこし輸入国 (2014/15)
ー日本は世界一のとうもろこし輸入国ー

(単位: %)

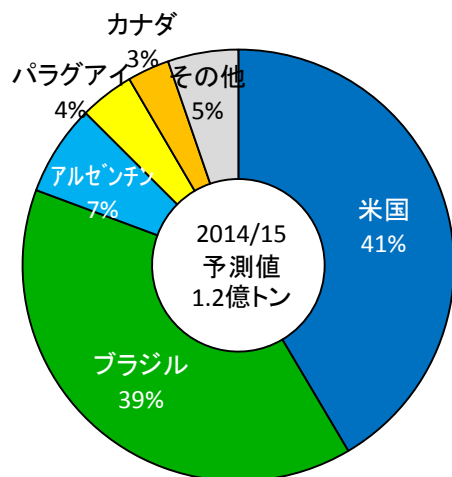


資料6 世界の大豆生産量と輸出量/日本の輸入量(2015年3月現在)

世界の大豆生産量

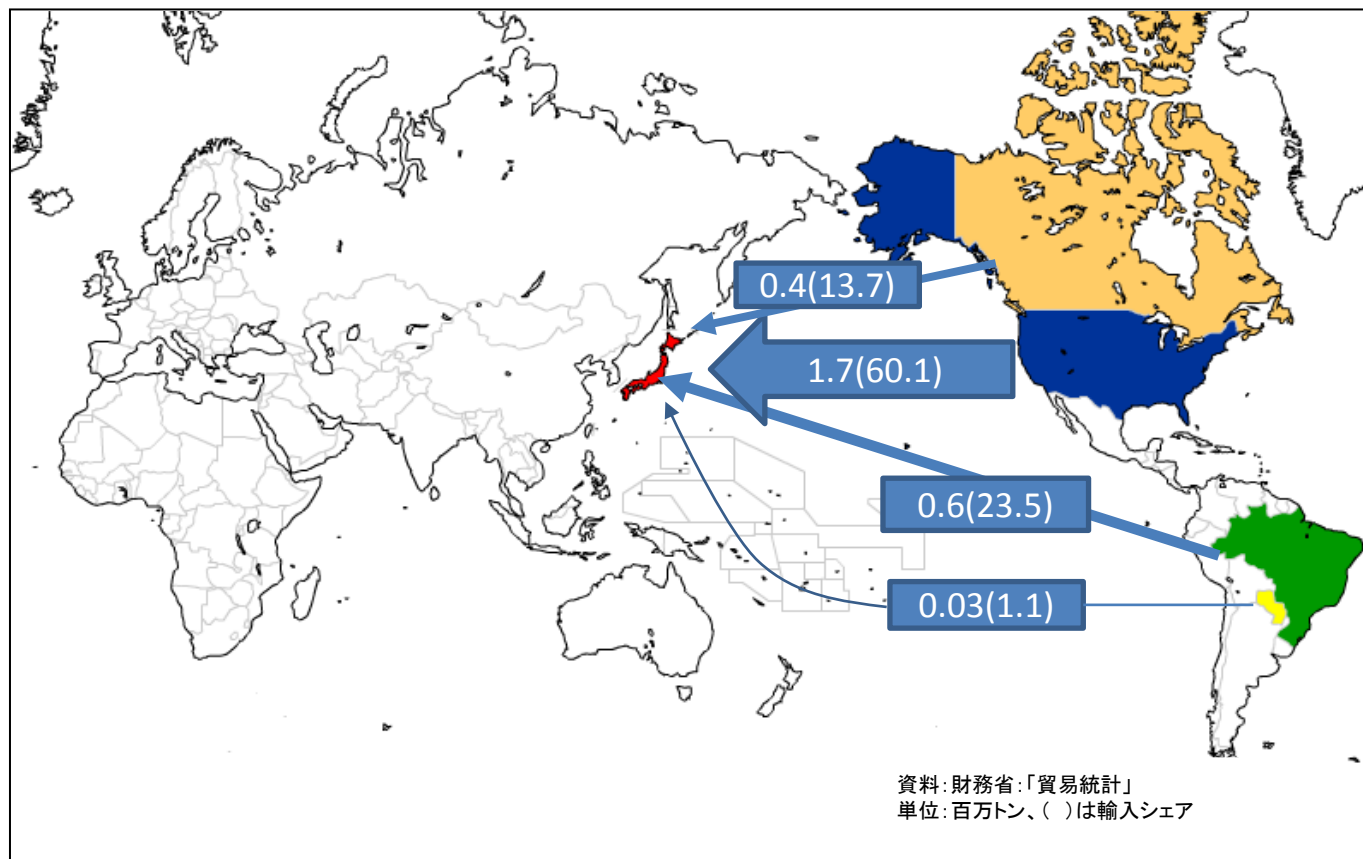


世界の大豆輸出量

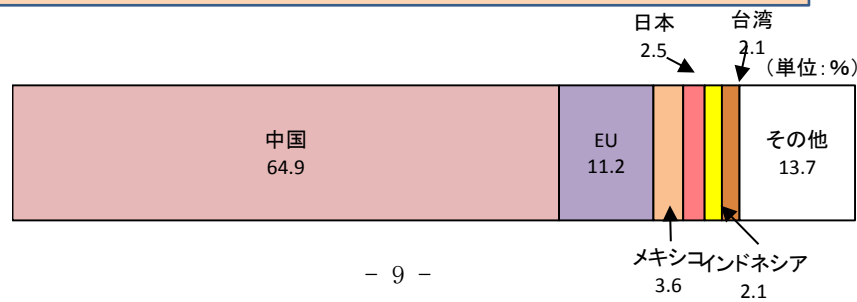


資料: USDA「PS&D」

日本の国別大豆輸入量(2013年)



＜参考＞世界の大豆輸入国 (2014/15)
—世界の約65%を中国が輸入—



日本の大豆生産量
2012年: 23.6万トン
2013年: 20.0万トン
(資料: 農林水産統計)

編給需別目品

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 **2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓**
 生産量は、カナダ、米国、豪州で減少するものの、EU、ロシア、中国等で増加することから、世界全体で史上最高の前年度を更に上回る724.8百万トンとなる見込み。
 なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、インドで下方修正された。

【消費量】 **2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓**
 消費量は、米国等で減少するものの、EU、中国等で増加することから、世界全体で史上最高の714.5百万トンとなる見込み。
 なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、インドで上方修正、米国でわずかに下方修正された。

【貿易量】 **2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑**
 世界全体の貿易量は、前年度より減少し、160.6百万トンとなる見込み。
 国別には、輸出国では、ロシア等で増加するものの、米国、カザフスタン等で減少する見込み。輸入国では、イラン等で増加するものの、ブラジル等で減少する見込み。
 なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、輸出国では、EUで上方修正、輸入国では、アルジェリア、日本で下方修正された。

【期末在庫量】 **2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓**
 期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では197.7百万トンとなる見込み。
 国別には、カナダ、インド等で在庫が取り崩されるものの、EU、ロシア等で積み増しされる見込み。世界全体の期末在庫率は27.7%と前年度より上昇する見込み。
 なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、インドで上方修正、EUで下方修正、米国でわずかに下方修正された。

図-1 世界の小麦のシェア (2014/15年度)

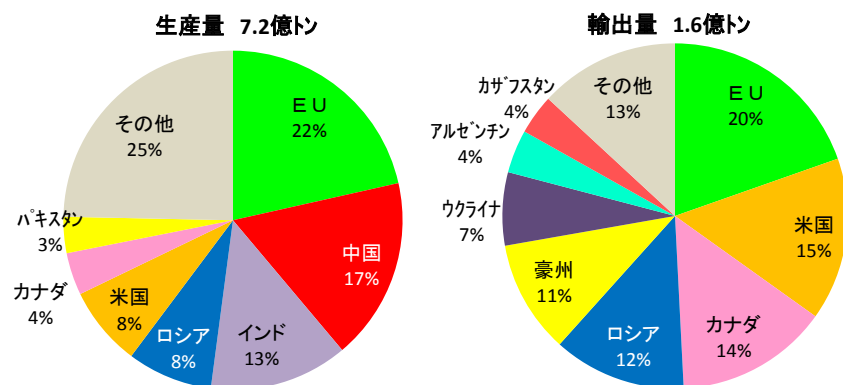


表-1 世界の小麦需給 (米国農務省)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	658.5	716.1	724.8	▲ 0.3	1.2
E U	134.0	143.5	155.7	-	8.5
中国	121.0	121.9	126.0	-	3.3
インド	94.9	93.5	95.9	▲ 0.1	2.5
米国	61.3	58.1	55.1	-	▲ 5.1
ロシア	37.7	52.1	59.0	-	13.3
カナダ	27.2	37.5	29.3	-	▲ 21.9
豪州	22.9	26.9	24.0	-	▲ 10.9
消 費 量	679.8	704.2	714.5	▲ 0.1	1.5
うち飼料用	137.1	130.6	140.1	0.4	7.3
中国	125.0	121.5	124.0	-	2.1
E U	119.3	115.8	124.5	-	7.6
インド	83.8	93.9	93.7	▲ 0.3	▲ 0.1
米国	37.8	34.2	32.3	0.0	▲ 5.6
ロシア	33.6	34.1	35.5	-	4.1
パキスタン	23.9	24.1	25.1	-	4.1
エジプト	18.7	18.5	18.4	-	▲ 0.5
貿 易 量	137.4	165.8	160.6	0.5	▲ 3.1
(輸出)					
米国	27.5	32.0	24.5	-	▲ 23.5
E U	22.7	31.9	31.5	0.5	▲ 1.3
カナダ	19.0	23.2	23.0	-	▲ 1.0
豪州	18.7	18.6	17.0	-	▲ 8.7
ロシア	11.3	18.5	20.0	-	7.9
ウクライナ	7.2	9.8	11.0	-	12.7
カザフスタン	6.3	8.1	6.0	-	▲ 25.9
(輸入)					
エジプト	8.3	10.2	10.5	-	3.2
インドネシア	7.1	7.4	7.7	-	4.2
ブラジル	7.4	7.1	6.7	-	▲ 5.2
アルジェリア	6.5	7.5	7.1	▲ 0.3	▲ 5.1
日本	6.6	6.1	5.9	▲ 0.1	▲ 3.6
イラン	6.6	4.8	7.0	-	45.8
E U	5.3	4.0	5.5	-	38.2
期 末 在 庫 量	175.6	187.5	197.7	▲ 0.1	5.5
中国	54.0	60.3	62.8	-	4.1
インド	24.2	17.8	16.5	0.2	▲ 7.5
米国	19.5	16.1	18.8	▲ 0.0	17.0
E U	10.8	10.6	15.8	▲ 0.5	48.7
カナダ	5.1	9.7	6.6	-	▲ 31.6
ロシア	5.0	5.2	9.1	-	73.9
イラン	4.1	5.2	5.1	-	▲ 1.9
期 末 在 庫 率	25.8%	26.6%	27.7%	▲ 0.0	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
 「World Agricultural Production」(10 March 2015)

(2) 小麦の主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が増加するものの、乾燥や春の低温等により単収が低下することから前年度より減少し、55.1百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が減少することから前年度より減少し、32.3百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、24.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率も33.1%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、消費量でわずかに上方修正された。結果として、期末在庫量がわずかに下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

冬小麦は、作付時には土壌水分量が十分で発芽進捗率も過去5年平均を上回ったが、その後、大平原中部・南部での乾燥による土壌水分不足、冬季の寒波、春の異常低温等から作柄が悪化。生産量は37.5百万トン（対前年度比10.7%減）。

春小麦及びデュラム小麦の作付けは2014年4～6月に実施。生育進捗は北西部で平年を上回ったものの大平原北部では低温湿潤型の天候となり過去5年平均より遅延。収穫は大平原北部で過去5年平均より3週間程度遅延したものの、9月末にはほぼ終了。春小麦とデュラム小麦の生産量は計17.6百万トン（対前年度比9.5%増）。

・2015/16年度

冬小麦の作付けは2014年9月頃から11月中旬に行われた。作付面積は作付遅延により前年度を5%下回る16.4百万ヘクタール。

国際穀物時理事会（IGC）「Grain Market Report」（2015.2.26）によれば、積雪（スノーカバー）が少ない大平原北部・中部の軟質赤色小麦（SRW）産地の一部では寒冷型の天候による作物への悪影響が懸念されている。また、（大平原南部等の）硬質赤色冬小麦（HRW）産地では積雪不足と乾燥型の天候により作柄が悪化した模様。

USDAは農業観測会議（2015.2.19-20）で2015/16年度の需給見通しを発表。生産量は56.7百万トン（対前年度比4.9%増）、消費量は33.5百万トン（同3.8%増）、輸出量は26.5百万トン（同8.3%増）、期末在庫量は20.8百万トン（同10.3%増）。

【貿易情報・その他】

USDA「Wheat Outlook」（2015.3.12）によれば、2014/15年度の輸出量は、2月26日時点で21.8百万トン（対前年同期比23.8%減）。国別には、日本2.9百万トン（同9.9%増）、メキシコ2.5百万トン（同10.3%減）、フィリピン2.1百万トン（同18.4%増）。なお、前年度最大の輸出先であった中国は0.3百万トン（同1519.4%減）。

我が国の輸入先国シェア 1位（2013年数量ベース 52.1%）
世界の生産量シェア 5位（2014/15年度 7.6%）
輸出量シェア 2位（2014/15年度 15.3%）

表－2 米国の小麦需給（市場年度：6月～翌年5月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15 (単位:百万トン)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	61.3	58.1	55.1	-	▲ 5.1
消費量	37.8	34.2	32.3	0.0	▲ 5.6
うち飼料用	10.1	6.1	4.1	-	▲ 33.6
輸出量	27.5	32.0	24.5	-	▲ 23.5
輸入量	3.3	4.6	4.4	-	▲ 5.2
期末在庫量	19.5	16.1	18.8	▲ 0.0	17.0
期末在庫率	29.9%	24.3%	33.1%	▲ 0.1	8.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	19.73	18.35	18.77	-	2.3
単収(t/ha)	3.11	3.17	2.94	-	▲ 7.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)

写真－1 米国中西部 インディアナ州テレホート地方

－霧と雪に覆われた冬小麦畑－（2015年3月2日撮影）

積雪（スノーカバー）は薄く、まばらな状態となっている。



写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH

イ カナダ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、単収、収穫面積共に減少することから前年度より減少し、29.3百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が減少することから前年度より減少し、9.8百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、23.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も20.1%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

春小麦及びデュラム小麦の作付けは2014年5月から6月に行われ、収穫は10月下旬にほぼ終了。6月下旬の大雨により、サスカチュワン州やマニトバ州の一部で洪水が発生。作付けができなかったり、作付けた苗が流される等の被害が発生し、作物の生育も遅延。7月は比較的温暖となり生育が進展し、8月上旬から収穫が開始されたが、大雨、強風、降雹等により作業が中断するとともに、一部の地域では病害虫や赤カビ病が発生。その後、9月に入り、平原の主産地では乾燥型の天候となったものの、土壤水分過多の状態が続く中、気温の低下や霜害の発生により作柄が悪化。春小麦及びデュラム小麦の生産量計は、26.4百万トン（対前年度比21.7%減）。

冬小麦は、主産地のオンタリオ州での作付けが2013年9月頃から行われ、収穫は2014年7月にほぼ終了。生産量は2.9百万トン（対前年度比24.3%減）。

・2015/16年度

冬小麦の作付けは2014年12月上旬に終了。農業市場情報システム（AMIS）「Market Monitor」（2015.3.5）によれば、休眠期を迎えた作物の状態は総じて良好。

中部、特にオンタリオ州では大豆の収穫遅延や降雪と土壤水分過多により作付けが遅れ、東部でも土壤水分不足により発芽が遅延。一方、西部では作付けの遅れにより作付面積が減少したものの土壤水分量は十分で発芽状態は良好。

国際穀物理事会（IGC）「Grain Market Report」（2015.2.26）によれば、冬小麦の作付面積は前年度より約25%減少するものの、生産量の大半を占める春蒔きの小麦、特にデュラム小麦は市場価格が高いことから作付けが増えたと見られ、作付面積は計10.0百万ヘクタール（対前年度比6%増）となる見込み。

【貿易情報・その他】

カナダ穀物協会（CGC）「Grain Statistics Weekly」（2015.3.5）によれば、2014/15年度（2014年8月～）の2015年3月1日時点の輸出量累計は、普通小麦926.6万トン（対前年同期比3.6%増）、デュラム小麦315.3万トン（同28.0%増）。

CGC「2014 Canadian Wheat Crop Quality Report」及び「Canadian Wheat and Durum Production」によれば、2014/15年度の春小麦（CWRS）の1等比率は17%（過去3年平均46%）、デュラム小麦（CWAD）の1～2等比率は12%（同65%）。

我が国の輸入先国シェア 2位（2013年数量ベース 27.1%）
世界の生産量シェア 6位（2014/15年度 4.0%）
輸出量シェア 3位（2014/15年度 14.3%）

表－3 カナダの小麦需給（市場年度：8月～翌年7月）

（単位：百万トン）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	27.2	37.5	29.3 (29.3)	-	▲ 21.9
消費量	9.6	10.1	9.8 (9.9)	-	▲ 3.1
うち飼料用	4.4	4.9	4.5 (5.2)	-	▲ 8.7
輸出量	19.0	23.2	23.0 (23.1)	-	▲ 1.0
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.1)	-	6.7
期末在庫量	5.1	9.7	6.6 (6.0)	-	▲ 31.6
期末在庫率	17.7%	28.9%	20.1% (18.2%)	-	▲ 8.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.50	10.44	9.46 (9.46)	-	▲ 9.4
単収(t/ha)	2.86	3.59	3.10 (3.09)	-	▲ 13.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」 (17 February 2015)

写真－2 オンタリオ州ロンドン地方

－雪に覆われた休眠期の冬小麦畑－
(2015年2月24日撮影)

休眠中の作物の状態は、総じて良好となっている。



写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH

ウ 豪州

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積が増加するものの、南東部の乾燥の影響により単収が低下することから前年度より減少し、24.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、7.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、17.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も23.7%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の実産量、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の消費量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

作付作業は例年5月から7月に行われるが、2014/15年度は好天に恵まれて作業が前倒しで進展し、2014年6月には全ての州で完了。

生育時期の8月から10月にかけては、東部のニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、サウスオーストラリア州の産地で降水量が平年を下回った。一方、豪州最大の産地である西部のウェスタンオーストラリア州では降雨に恵まれた。

収穫作業は9月下旬から開始され、ウェスタンオーストラリア州の一部地域では11月の降雨で作業が遅延したものの、12月は総じて高温乾燥型の天候が続き、月末にはほぼ終了。

また、豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian crop report」(2015.2.10)によれば、ウェスタンオーストラリア州の品質は、収穫期の降雨で土壌水分過多となった南部の一部を除き、総じて良好。ニューサウスウェールズ州のたんばく含有量は、北部では比較的高いが中部・南部では低め。ビクトリア州の全体的な品質は並(reasonable)。

・2015/16年度

ABARES「Agricultural commodities」(2015.3.3)によれば、大麦から収益性の高い小麦やなたねへの作付シフトや、単収が前年度に平均を下回った東部産地で上昇することにより、生産量は対前年度比3%増の24.4百万トン、輸出量は生産量が増加することから対前年度比6%増の17.9百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】

2015年2月18日、農業省は、オーストラリアの小麦及び大麦に対する中国の輸入条件に関し、新たな議定書に基づき改訂予定である旨を同省ウェブサイトに掲載。新たな議定書は、2014年12月に両国政府が合意し、2015年2月初旬に仮署名行って穀物関係者への周知が合意されたもの。オーストラリア側の予想では2015年4月頃に北京で正式署名される予定で、それまでの間は新旧両方の規定を適用。なお、同議定書により、中国が検疫上懸念しているカタツムリや雑草種子等の異物混入の最小化のため、中国側がスクリーニング(適格審査)の代替として認める、穀物業界市場アクセスフォーラム(GIMAF)が策定する業界管理計画(産地での特定の害虫の発生レベルの記録や流通段階での定期的な積荷の監視等)が導入されることとなる。

我が国の輸入先国シェア3位 (2013年数量ベース 15.5%)
世界の生産量シェア 9位 (2014/15年度 3.3%)
輸出量シェア 5位 (2014/15年度 10.6%)

表－4 豪州の小麦需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	22.9	26.9	24.0 (23.6)	-	▲ 10.9
消費量	6.7	7.0	7.5 (…)	0.5	7.9
うち飼料用	3.4	3.6	4.1 (…)	0.5	13.9
輸出量	18.7	18.6	17.0 (16.9)	-	▲ 8.7
輸入量	0.1	0.2	0.2 (…)	-	-
期末在庫量	4.7	6.2	5.8 (…)	▲ 0.6	▲ 5.7
期末在庫率	18.3%	24.1%	23.7% (…)	▲ 2.9	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	12.98	13.47	13.80 (13.81)	-	2.4
単収(t/ha)	1.76	2.00	1.74 (1.71)	-	▲ 13.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
ABARES 「Agricultural commodities」(3 March 2015) (※ABARESは作付面積)

写真－3 ニューサウスウェールズ州ランキンズスプリング地方
－収穫後の小麦畑を耕起する様子－（2015年2月3日撮影）

土壌水分の保全と除草のため耕起を行っている



写真提供：Australian Crop Forecasters

エ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積の増加及び春から初夏にかけての好天による単収の上昇から前年度より増加し、史上最高の155.7百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が増加すること等から前年度より増加し、124.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、31.5百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より増加し、5.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率も10.1%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、輸出量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

冬小麦の作付けは2013年9～11月頃に行われ、2014年7月頃から開始された収穫は9月末にほぼ終了。6～7月の結実期に降雨に恵まれたことから単収は5.81トン/ヘクタールと前年度を上回り、生産量は史上最高の155.7百万トンとなる見込み。しかしながら、8～9月の収穫期にも一部産地では降雨が続き、収穫作業が遅延するとともに品質が劣化。

・2015/16年度

冬小麦の作付時の気象条件は総じて良好で、2014年12月上旬にほぼ終了。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Weather Highlight」(2015.3.10)によれば、2月は、英国南東部からフランス、イタリア、バルカン半島では冬小麦の休眠に適した温暖湿潤型の天候となった。また、イタリア北部では大雪により灌漑用水が十分確保され、イベリア半島でも降雨により栄養成長期を迎えた作物の土壌水分量は十分な状況。一方、ドイツ及びポーランドでは乾燥型の天候となったが、依然として作物の生育に必要な土壌水分量は保たれている模様。なお、主産地では積雪(スノーカバー)が不足気味だが、温暖な気候により凍害等の懸念は低くなっている。

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Indicators」(2015.3.11)によれば、デュラム小麦の作付面積は、市場価格が高いことから前年度を上回るものの、普通小麦は前年度を下回ることから、小麦全体の生産量は前年度を下回る149.6百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】

USDA「Wheat Outlook」(2015.3.12)は、引き続き堅調なペースで輸出が進んでいることから、2014/15年度の輸出量を前月から0.5百万トン上方修正した。これにより、2014/15年度の輸出量は31.5百万トンと、史上最高となった前年度には及ばないものの、米国の輸出量を6.5百万トン上回る見込み。

我が国の輸入先国シェア5位 (2013年数量ベース 0.9%)
世界の生産量シェア 1位 (2014/15年度 21.5%)
輸出量シェア 1位 (2014/15年度 19.6%)

表－5 EUの小麦需給（市場年度：7月～翌年6月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	134.0	143.5	155.7 (155.9)	-	8.5	
消費量	119.3	115.8	124.5 (124.5)	-	7.6	
うち飼料用	51.0	48.0	56.0 (52.0)	-	16.7	
輸出量	22.7	31.9	31.5 (32.0)	0.5	▲ 1.3	
輸入量	5.3	4.0	5.5 (5.2)	-	38.2	
期末在庫量	10.8	10.6	15.8 (14.0)	▲ 0.5	48.7	
期末在庫率	7.6%	7.2%	10.1% (8.9%)	▲ 0.4	2.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	25.97	25.83	26.80 (27.43)	-	3.8	
単収(t/ha)	5.16	5.56	5.81 (5.84)	-	4.5	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain : World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
EU 「Balance Sheets For Cereals and Oilseeds and Rice」(26 February 2015)
「Crop monitoring in Europe」(23 March 2015)

写真－4 フランス西部 シャラント＝マリティーム地方東部
－ 休眠状態の冬小麦 － (2015年3月10日撮影)



写真提供：Serge Brossard氏

オ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積が減少するものの単収が上昇することから、史上最高の126.0百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が増加すること等から前年度より増加し、史上2番目の124.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、1.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より大幅に減少(▲77.8%)し、1.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率も50.2%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

冬小麦の作付時期(2013年10～11月)は適温で土壌水分量も十分となり、休眠期(2013年12月～2014年1月)は乾燥していたものの温暖で、2月の降雨により土壌水分量が上昇。4～5月も適期の降雨により幼穂形成期から登熟期の生育条件も良好となり、例年より早く完熟期を迎えた。収穫作業も好天に恵まれ6月にほぼ終了。品質は平年を上回る模様。

春小麦の作付けは、2014年4～5月に行われた。収穫は8月から開始され、東北部の一部で降雨により作業が中断したものの9月中にほぼ終了。

・2015/16年度

冬小麦の作付けは2014年9月下旬から開始され、気象条件に恵まれたため11月下旬にほぼ終了。冬季の気温は総じて平年を上回り、北部の産地の休眠(こぐわい)南部の産地の作物の生長は順調に進展。2015年2月は気温が高めとなり、黄淮(黄河と淮河の間)南部では例年より早く休眠明けを迎えた。

中国中央气象台「農業気象週報」(2015.3.15)によれば、3月上旬は総じて日照量が十分となって気温も平年を上回り、冬小麦の生育や春小麦の作付けが進展。冬小麦は、西北部、華北の大半と黄淮北部で再生長期、黄淮南部及び揚子江中下流域で概ね止葉期、西南部東部で止葉期～出穂期、四川省中部及び雲南省で穂揃期～開花期を迎えている。また、春小麦は、西北部中部及び東北部で作付けが開始されている。

【貿易情報・その他】

2014年12月12日、中国国家發展改革委員会(NDRC)は、2015年の小麦の関税割当(TRQ)枠内数量を2014年と同水準(9.6百万トン)にすると発表。

2015年2月2日、中国共産党・国务院は、農業政策に関する指針となる「2015年一号文件」を公表。小麦に関し、最低買入価格での政府買入制度の継続を明記。

中国税関(海関)統計(2015.3.23)によれば、2015年1月～2月の小麦輸入量累計は対前年同期比84.3%減の20.4万トン。国別の内訳は、豪州13.8万トン(シェア67.7%)、カナダ6.1万トン(同30.0%)、米国0.1万トン(同0.7%)。

(世界の生産量シェア2位(2014/15年度 17.4%))

表－6 中国の小麦需給(市場年度：7月～翌年6月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	121.0	121.9	126.0 (126.2)	-	3.3	
消費量	125.0	121.5	124.0 (123.1)	-	2.1	
うち飼料用	25.0	21.0	23.0 (23.2)	-	9.5	
輸出量	1.0	0.9	1.0 (0.4)	-	12.4	
輸入量	3.0	6.8	1.5 (1.5)	-	▲ 77.8	
期末在庫量	54.0	60.3	62.8 (63.0)	-	4.1	
期末在庫率	42.8%	49.2%	50.2% (51.0%)	-	1.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.27	24.12	24.10 (24.06)	-	▲ 0.1	
単収(t/ha)	4.99	5.06	5.23 (5.24)	-	3.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」(26 February 2015)

写真－5 中国華東地区 安徽省 亳州市の小麦

－生長を再開した冬小麦－(2015年3月16日撮影)



写真提供：アイ・シー・ネット(株)

カ インド

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積が史上最高となり単収も前年度より上昇することから、史上最高の95.9百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、93.7百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、3.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も17.0%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の消費量で下方修正、輸出量で上方修正、2014/15年度の実産量、消費量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

インドでは、例年10月から翌年2月に作付けが行われ、3月から5月に収穫が行われる。

作付時期の土壌水分量は十分で、生育期の生育条件も良好となり、登熟期も冷涼な気候に恵まれた。収穫は3月下旬から開始され、北部の一部地域では豪雨や雹により遅延したものの6月上旬にはほぼ終了。作柄は総じて良/やや良。

インド農業省の最終生産高予想(2015.2.18)によれば、生産量は95.9百万トン。

・2015/16年度

モンスーン期到来の遅れに伴う米の収穫遅延により作付開始が遅れたものの、主産地の北部や中部では灌漑用水が十分で、2014年12月には降雨にも恵まれたことから、作業はほぼ平年並みのペースで進展し、2015年2月にはほぼ終了。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Weather Highlights」(2015.3.10)によれば、2015年2月は、インドの大半では作物の成熟に適した乾燥型の天候となったが、北部の一部産地では降雨が観測され、生育の遅延や品質の低下が懸念されている。

インド農業省の第2次生産高予想(2015.2.18)によれば、小麦生産高は前年度を若干下回る95.8百万トンとなる見込み。また、同省は、2月27日、作付面積が前年度(30.47百万ヘクタール)を下回る30.32百万ヘクタールになるとの予測を公表。

【貿易情報・その他】

インドは、政府在庫に関し、政府備蓄として3.0百万トン、4月1日時点の緩衝在庫として4.46百万トンの計7.46百万トンを目指しているところ、インド食料公社(FCI)によれば、2015年3月1日時点の政府在庫量は19.5百万トン(前年同期20.8百万トン)と、同目標を上回っている。

2015年2月16日、インド消費者・食品公共分配省は、公的分配制度による2015/16年度の小麦買入目標数量を30.1百万トンに設定した旨を公表(2014/15年度買入実績は28.2百万トン)。

〔世界の生産量シェア3位(2014/15年度 13.2%)
輸出量シェア10位(2014/15年度 2.2%)〕

表ー7 インドの小麦需給(市場年度：4月～翌年3月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	94.9	93.5	95.9 (95.9)	▲ 0.1	2.5
消 費 量	83.8	93.9	93.7 (93.5)	▲ 0.3	▲ 0.1
うち飼料用	3.4	4.8	4.5 (5.0)	-	▲ 6.3
輸 出 量	6.8	6.1	3.5 (3.2)	-	▲ 42.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.1 (…)	-	66.7
期末在庫量	24.2	17.8	16.5 (17.3)	0.2	▲ 7.5
期末在庫率	26.7%	17.8%	17.0% (17.8%)	0.3	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.86	30.00	30.60 (31.50)	-	2.0
単収(t/ha)	3.18	3.12	3.13 (3.04)	-	0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain : World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」(26 February 2015)

写真ー6 インド北部 ハリヤナ州

ー登熟期を迎えた小麦(2014年12月中旬に作付け)ー
(2015年3月5日撮影)



写真提供：Agriwatch Research Team

キ ロシア

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積の増加及び単収の上昇から前年度より増加し、59.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、35.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、史上2番目の20.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率も16.3%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、消費量、輸入量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

冬小麦の作付けは2013年8月から11月末に行われ、生育期間中は主産地の西部で総じて好天に恵まれ、収穫は2014年8月下旬に終了。

春小麦は、2014年7月前半に一部で土壌水分不足となり生育不良が懸念されたが、8月の降雨で作柄は改善。収穫は一部で降雨・降雪、低温で停滞したが、11月中旬にほぼ終了。

・2015/16年度

冬小麦の作付けは2014年8月中旬から10月末に行われた。作物の越冬条件は総じて並で、作物の枯死はヴォルゴグラード州の一部産地を除き見られていない。南部で生長を再開した作物は発芽期から分けつ期にある。

ロシア農業省によれば、3月19日時点で、春作物の作付予定面積(51.9百万ヘクタール)のうち48.5万ヘクタール(0.9%)で作付けが終了。また、冬作物の作付面積16.8百万ヘクタールのうち、4.5百万ヘクタール(26.8%)で追肥が終了。

【貿易情報・その他】

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Indicators」(2015.3.3)によれば、2015年1月の輸出量が2.1百万トンであったが、2月1～25日の輸出量は32.2万トン。

3月11日、フォードロフ農業大臣は、農業省は、現時点では2月1日より導入された小麦輸出関税に何らかの変更を加えることは検討していないと述べるとともに、その他の穀物に対する類似の関税導入は検討していないと付言。

現地報道(2015.3.12)によれば、農業省は、穀物の市場価格が若干下がったと伝えた。穀物価格は2015年1月に最高値に達した後、品目によって0.5～2%値下がりしており、農業市況研究所によれば、3等小麦の価格は、2014年12月から約1割低下し、2015年3月6日時点では10,892ルーブル/トン(中央黒土地帯、加工業者渡し価格)となった。

現地調査会社によれば、2月1日の小麦輸出関税導入後、輸出業者による買付け需要は低下し、逆に在庫を国内市場向けに販売する動きも見られ始めた。こうした中、小麦の国内価格は2月後半から本格的に下がり始め、一部の飼料メーカーは、使用原料に占めるとうもろこしを減らし小麦を増やす動きを見せた。なお、輸出取引が多い南部地域では、小麦と違って輸出関税がかからない大麦の輸出需要が増しており、3月6日時点の国内価格は小麦を上回っている。

〔世界の生産量シェア4位 (2014/15年度 8.1%)
輸出量シェア4位 (2014/15年度 12.5%)〕

表－8 ロシアの小麦需給（市場年度：7月～翌年6月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	37.7	52.1	59.0 (59.0)	-	13.3
消 費 量	33.6	34.1	35.5 (36.5)	-	4.1
うち飼料用	11.9	12.5	13.0 (14.0)	-	4.0
輸 出 量	11.3	18.5	20.0 (20.3)	-	7.9
輸 入 量	1.2	0.8	0.4 (0.5)	-	▲ 56.3
期末在庫量	5.0	5.2	9.1 (8.2)	-	73.9
期末在庫率	11.0%	9.9%	16.3% (14.3%)	-	6.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.30	23.40	23.60 (25.00)	-	0.9
単収(t/ha)	1.77	2.23	2.50 (2.36)	-	12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

写真－7 ロシア南部ヴォルゴグラード州エランスキー地区 －生長を再開した冬小麦－（2015年3月7日撮影）

積雪(スノーカバー)は薄く作付面積の1～2割で作物が露出。
葉は黄化し始めており作物の状態が思わしくなく、同地域では
作付面積の約50%が春に蒔き直しになる可能性がある。



ク ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が減少するものの単収が上昇することから前年度より増加し、24.8百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が増加することから前年度より増加し、12.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、史上2番目の11.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率は23.8%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、生産量で上方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度

冬小麦の作付けは2013年9月頃から開始され、9月の降雨により遅延したものの11月中旬にほぼ終了。生育期間中は総じて好天に恵まれたものの、7月の局地的な集中豪雨や突風により、一部地域で収穫前の作物に倒伏や黄化等の被害が発生。成熟期に大気中や土壌の水分過多により、品質は南部や中央部の一部以外は並以下の模様。なお、収穫は2014年6月中旬から7月下旬に行われた。

春小麦の作付けは2014年3月から6月中旬に行われた。8月上中旬の猛暑は生育に悪影響を及ぼしたが、下旬には気温が低下して降雨も観測された。収穫作業は、9月上中旬に好天に恵まれて進展した後、9月下旬の降雨で南部・中央部・東部の一部で作業が遅れが生じたものの、10月にはほぼ終了。

・2015/16年度

冬小麦の作付けは2014年8月下旬から11月中旬に行われた。2015年1月19日時点の小麦の作付面積は6.8百万ヘクタール（対前年度比12%増）。冬季に休眠状態であった冬作物は、南部の大半と中央部の一部で2月末には生長を再開。作物は主に分けつ期だが、一部は発芽期にある。

春小麦の作付けも既に開始されており、ウクライナ農業政策食料省によれば、3月20日時点の作付済面積は3.5万ヘクタール、作付進捗率は26%。

【貿易情報・その他】

ウクライナ税関によれば、2014/15年度（2014年7月～）の2015年1月までの小麦輸出量は、累計で844.7万トン（対前年同期比21.6%増）。国別には、エジプト203.6万トン（シェア24.1%）、スペイン71.8万トン（同8.5%）、パキスタン50.3万トン（同6.4%）、韓国49.9万トン（同5.6%）。

ウクライナ国家統計局によれば、2015年3月1日時点の小麦在庫量は6.2百万トン。なお、穀物全体の在庫量は19.3百万トン（前年同期比22%増）で、うち、生産者の在庫量は10.7百万トン（シェア55.4%）、加工・保管業者の在庫量は8.6百万トン（同44.6%）。

我が国の輸入先国シェア 4位（2013年数量ベース 4.3%）
世界の生産量シェア 8位（2014/15年度 3.4%）
輸出量シェア 6位（2014/15年度 6.9%）

表－9 ウクライナの小麦需給（市場年度：7月～翌年6月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	15.8	22.3	24.8 (24.8)	-	11.1
消費量	11.4	11.5	12.0 (12.5)	-	4.3
うち飼料用	3.1	3.4	4.0 (4.4)	-	17.6
輸 出 量	7.2	9.8	11.0 (11.8)	-	12.7
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (…)	-	▲ 28.6
期末在庫量	2.6	3.7	5.5 (4.4)	-	49.0
期末在庫率	13.9%	17.3%	23.8% (17.9%)	-	6.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.63	6.57	6.30 (6.30)	-	▲ 4.1
単収(t/ha)	2.80	3.39	3.93 (3.93)	-	15.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

写真－8 ウクライナ ドニエプロペトロフスク州(黒土地帯)
－生長を再開した冬小麦(分けつ期)－
(2015年3月8日撮影)

作物はきれいに生え揃っており、積雪(スノーカバー)はないが約9割は良好な状態。



ケ カザフスタン

(世界の輸出量シェア 8位 (2014/15年度 3.7%))
表-10 カザフスタンの小麦需給(市場年度: 7月～翌年6月)

(単位: 百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	9.8	13.9	13.0 (13.0)	-	▲ 6.8
消費量	6.8	6.8	6.8 (6.6)	-	-
うち飼料用	2.0	2.0	2.0 (1.8)	-	-
輸 出 量	6.3	8.1	6.0 (6.0)	-	▲ 25.9
輸 入 量	0.0	0.0	0.4 (0.2)	-	3900.0
期末在庫量	2.9	2.0	2.6 (2.2)	-	29.6
期末在庫率	22.5%	13.4%	20.2% (17.5%)	-	6.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.40	12.95	11.92 (12.75)	-	▲ 8.0
単収(t/ha)	0.79	1.08	1.09 (1.02)	-	0.9

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の春小麦の作付けは、2014年3月下旬から6月上旬に行われ、11月にほぼ終了。生産量は前年度を下回る13.0百万トン(春小麦12.4百万トン、冬小麦0.6百万トン)となる見込み。

米国農務省「World Agricultural Production」(2014.11.10)によれば、7月の時期はずれの低温湿潤型の天候で生育が遅延し、収穫作業の開始が遅れた。また、収穫時期には、10月の降雨・降雪により作業が停滞するとともに、単収・品質が低下した模様。

なお、国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2014.11.27)によれば、北部産地では初夏の乾燥型の天候で生育が遅延するとともに、収穫の最終段階では降雨・降雪により作業が中断。

【貿易情報・その他】

3月13日、下院の農業問題委員会のシャエキン議員は、ルーブル下落を背景に、2014年末から2015年初めにロシア産穀物を約50万トン購入したと発言。なお、ロシアは2月1日から小麦輸出関税を導入したが関税同盟加盟国のカザフスタンには特に影響はない。

カザフスタン財務省税関監督委員会によれば、2014/15年度(2014年7月～)の2015年1月までの小麦輸出货量(関税同盟加盟国(ロシア、ベラルーシ)を除く)は、累計で190.2万トン(対前年同期比33.5%減)。

カザフスタン国家経済省経済委員会によれば、2015年3月1日時点の小麦在庫量は924.5万トン(2月1日時点1003.9万トン)。うち、食料用は745.4万トン(同822.4万トン)、種子用は131.4万トン(同128.3万トン)、飼料用は47.5万トン(同53.1万トン)。

コ アルゼンチン

(世界の輸出量シェア 7位 (2014/15年度 4.0%))
表-11 アルゼンチンの小麦需給(市場年度: 12月～翌年11月)

(単位: 百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	9.3	10.5	12.5 (13.9)	-	19.0
消費量	6.2	6.1	6.2 (5.5)	-	1.7
うち飼料用	0.3	0.1	0.1 (0.4)	-	-
輸 出 量	3.6	2.2	6.5 (7.0)	-	195.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	100.0
期末在庫量	0.3	2.6	2.5 (3.1)	-	▲ 4.3
期末在庫率	3.0%	31.0%	19.4% (24.8%)	-	▲ 11.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	3.60	3.50	4.20 (5.26)	-	20.0
単収(t/ha)	2.58	3.00	2.98 (2.64)	-	▲ 0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の作付けは2014年5～8月に行われ、収穫は2015年1月上旬にほぼ終了。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(2015.2.10)によれば、北部からコルドバ州にかけての産地では、開花期～登熟期に乾燥型の天候となったこと、穀倉地帯の中央部や南部では、気温が平年を上回って生育が進む中、急激な気温低下で受粉に十分な時間がとれなかったことが単収低下や品質悪化につながったと見られる。また、サンタフェ州、エンタリオス州及びブエノスアイレス州の一部産地では、生育期間中の大半で激しい降雨に見舞われ、病害虫の発生や受粉期～乳熟期前に窒素肥料が土壌から流出する等の被害を受けた模様。

このため、単収が前年度を下回るものの、シーズン初めの市場価格が高かったこと等により収穫面積が増加することから、生産量は前年度を19.0%上回る12.5百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】

アルゼンチン経済省は、2014/15年度の小麦・小麦粉の輸出枠について、2014年11月6日に150万トン、12月11日に100万トン、2015年2月13日に100万トンの計350万トンを承認。

アルゼンチン農牧漁業省農畜食糧衛生品質管理センター(SENASA)によれば、2015年1月の小麦輸出货量は46.1万トン(対前年同期比149.9%増)。国別には、ブラジルが44.2万トン(シェア95.8%)と大半を占め、次いで、チリ0.5万トン(同2.0%)、マダガスカル0.5万トン(同0.8%)、米国0.4万トン(同0.8%)となっている。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

生産量は、ブラジル、アルゼンチンで作付面積減少により減少、中国、ウクライナ等でも減少するものの、EU、米国で増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の989.7百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、アルゼンチンで上方修正された。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

消費量は、米国、中国等で飼料用需要の増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の976.5百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正された。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑

世界全体の貿易量は、前年度より減少し、116.8百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、米国、アルゼンチン、ウクライナ等で減少する見込み。輸入国では、日本等で増加し、EU、エジプト等で減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、輸出国では、米国、ブラジル、アルゼンチンで上方修正された。

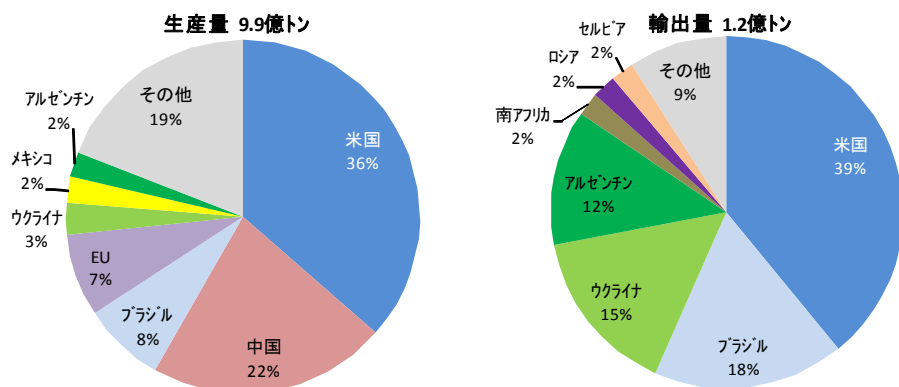
【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↓

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では185.3百万トンとなる見込み。

国別には、ブラジル、南アフリカ等で在庫が取り崩されるものの、米国、中国等で積み増しされる見込み。期末在庫率は19.0%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、南アフリカ、米国、アルゼンチンで下方修正された。

図－1 世界のとうもろこしのシェア（2014/15年度）



表－1 世界のとうもろこし需給（米国農務省）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	868.0	989.6	989.7	▲ 1.6	0.0
米 国	273.2	351.3	361.1	-	2.8
中 国	205.6	218.5	215.5	-	▲ 1.4
ブラジル	81.5	80.0	75.0	-	▲ 6.3
EU	58.9	64.3	74.2	-	15.4
ウクライナ	20.9	30.9	28.5	-	▲ 7.9
アルゼンチン	27.0	26.0	23.5	0.5	▲ 9.6
インド	22.3	24.3	22.5	-	▲ 7.3
消 費 量	864.5	953.1	976.5	1.1	2.5
うち飼料用	517.7	573.1	597.2	1.6	4.2
米 国	263.0	293.1	302.2	-	3.1
中 国	200.0	212.0	216.0	-	1.9
EU	69.6	76.5	78.5	-	2.6
ブラジル	52.5	55.0	56.5	-	2.7
メキシコ	27.0	31.7	33.6	-	5.8
インド	17.5	19.6	20.0	-	2.0
日本	14.5	15.1	15.4	-	2.0
貿 易 量 (輸出)	95.2	130.4	116.8	1.7	▲ 10.4
米 国	18.6	48.7	45.7	1.3	▲ 6.1
ブラジル	25.0	21.0	20.5	1.0	▲ 2.4
アルゼンチン	18.7	17.0	14.5	1.0	▲ 14.7
ウクライナ	12.7	20.0	18.0	-	▲ 10.0
インド	4.7	3.9	2.5	-	▲ 35.4
ロシア	1.9	4.2	2.5	-	▲ 40.4
パラグアイ	2.8	2.4	2.3	-	▲ 3.0
(輸入)					
日本	14.4	15.1	15.4	-	1.9
EU	11.4	15.9	8.0	-	▲ 49.7
メキシコ	5.7	11.0	10.9	-	▲ 0.5
韓国	8.2	10.4	9.6	-	▲ 7.8
エジプト	5.1	8.5	7.5	-	▲ 11.8
イラン	3.7	5.5	5.5	-	0.0
台湾	4.2	4.4	4.2	-	▲ 4.5
期末在庫量	135.7	172.1	185.3	▲ 4.4	7.6
中国	67.6	77.3	79.2	-	2.5
米国	20.9	31.3	45.2	▲ 1.3	44.3
ブラジル	14.2	19.0	17.8	-	▲ 6.3
EU	5.2	6.4	7.6	-	18.1
南アフリカ	0.7	2.2	1.4	▲ 2.2	▲ 35.5
アルゼンチン	1.3	1.5	1.1	▲ 1.0	▲ 25.7
期末在庫率	15.7%	18.1%	19.0%	▲ 0.5	0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)

(2) とうもろこしの主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が減少するものの、好天に恵まれ単収が上昇することから、史上最高の361.1百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要及びエタノール用等需要が増加することから、前年度より増加し、302.2百万トンとなる見込み。

輸出量は、大幅に増加した前年度に比べ減少し、45.7百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、0.6百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、45.2百万トンと前年度より大幅に増加(+44.3%)し、期末在庫率も13.0%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、輸出量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国中西部では、例年、とうもろこしの作付けは4月中旬から5月中旬にかけて行われる。2014年2月以降、厳しい寒さが続いたコーンベルトの北部では凍結した土壌の溶解に時間を要し、作付作業に遅れが生じたが、5月初旬以降気温が上昇したことにより、作付作業の遅れを一気に取り戻した。6月下旬、北部産地では多雨により作柄の悪化が懸念されたが、その後は総じて理想的な天候が続き、作柄は極めて良好となり、一部の州を除き11月末までに収穫作業は終了した。

【貿易情報・その他】

2015年2月11日、米国農務省は向こう10年間の長期予測(ベースライン予測)を発表した。2015/16年度のとうもろこしの作付面積は、35.6百万ヘクタールと2014/15年度(36.8百万ヘクタール)を3.2%下回る見通し。その後、作付面積は2024/25年度まで36.0百万～36.4百万ヘクタールと横ばいで推移する見通し。これは、近年のとうもろこし価格の低迷による収益性の低下により、農家のとうもろこしに対する生産意欲が薄れることによる。単収は概ね順調に上昇することから、2015/16年度の生産量は341.5百万トンと2014/15年度(365.9百万トン)を6.7%下回るが、2016/17年度以降は年々増加し、2024/25年度には383.2百万トンまで増加する見通し。

2013年11月18日以降、中国は、未承認のGM(遺伝子組換え)種子であるMIR162が検出された事を理由に、米国産とうもろこしの輸入を大幅に制限してきた。この結果2014年1～11月の米国産とうもろこしの中国向け輸出は、前年同期に比べ5割以上減少した。また、DDGS(とうもろこしからエタノールを生産する際の副産物で、家畜飼料として利用される)の輸入も同時に規制していたが、2014年12月17日、シカゴにて米中合同商業貿易委員会(JCCT)が開催された際、汪洋中国副首相はGMとうもろこし1種(MIR162)及びGM大豆2種の輸入を正式に承認した。

我が国の輸入先国シェア	1位(2013年数量ベース)	44.8%
世界の生産量シェア	1位(2014/15年度)	36.5%
輸出量シェア	1位(2014/15年度)	39.1%

表－2 米国のとうもろこし需給(市場年度：9月～翌年8月)
(単位：百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	273.2	351.3	361.1	-	2.8
消費量	263.0	293.1	302.2	-	3.1
うち飼料用	109.6	127.9	134.6	1.3	5.2
エタノール用等	117.9	130.4	132.1	▲ 1.3	1.3
輸出量	18.6	48.7	45.7	1.3	▲ 6.1
輸入量	4.1	0.9	0.6	-	▲ 29.7
期末在庫量	20.9	31.3	45.2	▲ 1.3	44.3
期末在庫率	7.4%	9.2%	13.0%	▲ 0.4	3.8

(参考)

収穫面積(百万ha)	35.36	35.39	33.64	-	▲ 4.9
単収(t/ha)	7.73	9.93	10.73	-	8.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)

写真－1 オハイオ州(2015年2月25日撮影)
一雪に覆われたとうもろこし畑－



写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH

【バイオエタノール】

米国におけるとうもろこしのエタノール向け需要は、RFS（再生可能燃料基準）によるバイオ燃料の義務付け使用量の増加等の要因で、とうもろこし需要の約4割を占めるまで増加してきた。2013/14年度には、とうもろこしの豊作により価格が下落したため、エタノール向け需要が大幅に拡大したものの、2014/15年度は、米国のガソリン需要の低迷に伴い、エタノール向け需要もわずかな増加に留まっている（図-2）。

エタノールの生産量は、2012年6月に入り、とうもろこしの価格高騰を受け減少し始め、1日当たり90万バレル超だった生産量が7月以降は80万バレル前後の水準で推移した。2013年4月に入り、原料価格の下落及び粗利益の回復を受け増加、85万バレル前後で推移していたが、2013/14年度における米国産とうもろこしの大豊作が確定的となった9月後半以降更に増加し、90万～95万バレルで推移、輸出需要の増加と低い原料価格から2014年12月中旬には99.2万バレルと、米国エネルギー情報局（EIA）が統計を取り始めた2010年以降で最高値を記録したが、その後徐々に減少し、2015年3月現在、90～95万バレルで推移している（図-3）。今後は、ガソリン価格の下落に伴いエタノール価格も下落し、エタノールの製造採算が悪化していることや、在庫量が高水準となっていることから、エタノール生産量も減少傾向を辿るものと見られている。

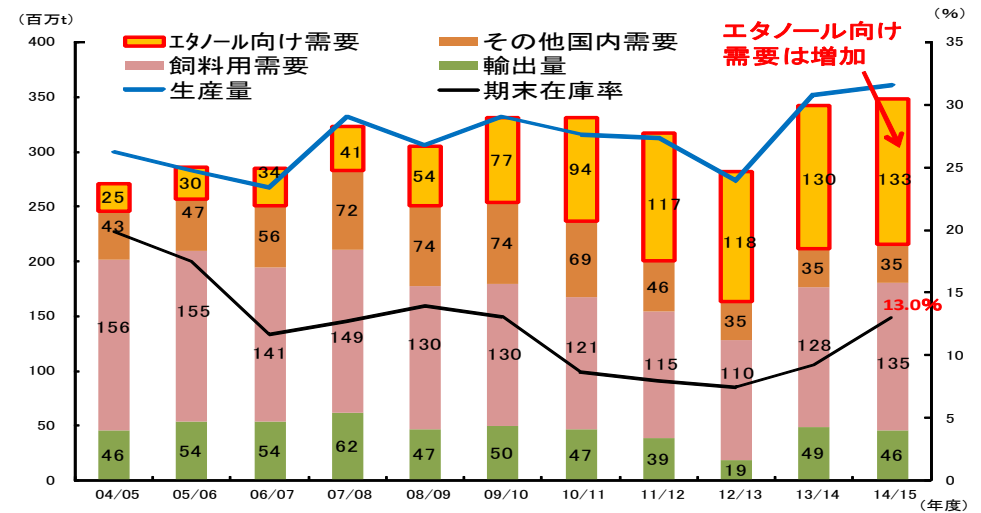
米国農務省が発表した向こう10年間の長期予測（ベースライン予測）（2015.2.11）によれば、エタノールの生産量は、向こう10年間ほぼ横ばいで推移する見込み。「ブレンドの壁（blend wall）」という制約要因がある他、燃費向上によるガソリン消費の低下が見込まれるため。
※「ブレンドの壁」：ガソリンにはバイオエタノール15%混合（E15）が認められているが、給油所の設置数及び関連インフラ等の問題により普及が進んでいない。バイオエタノール85%混合（E85）の市場は僅小である。現在、バイオエタノール10%混合（E10）が米国内市場の大勢を占めており、エタノール需要が伸び悩んでいる要因となっている。

2013年11月15日、米国環境保護局（EPA）は2014年の再生可能燃料の使用義務について181.5億ガロンから152.1億ガロンへの引下げを提案した。とうもろこし由来のエタノール使用義務量は144億ガロンから130億ガロンに引き下げられると見られている。

2014年6月6日、EPAは燃料油の精製業者に対し、2013年バイオ燃料使用義務遵守についての報告期限を延期した。精製業者は割当てられた義務数量以上のバイオ燃料を使用した場合、その超過分をRIN（再生可能燃料識別番号）の形で次年度の義務数量の20%まで繰り越すことが出来るが、2014年使用義務数量が未だ確定していない中、精製業者の次年度へのRINの繰越数量が決められない状況となっている。

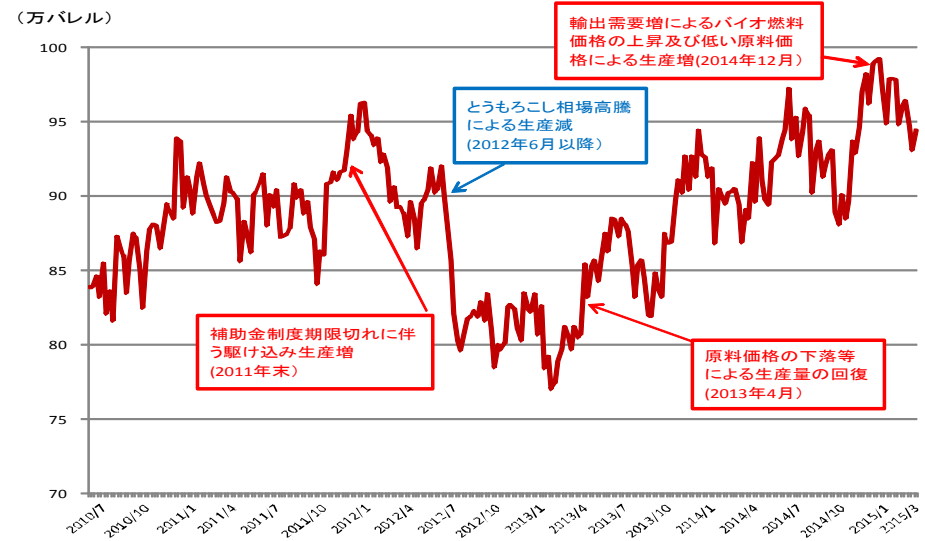
2014年11月21日、EPAは2014年の再生可能燃料使用義務量の決定を年明けに延長する旨発表した。また、2014年使用義務数量の決定が先延ばしされたことにより、RINの報告期限も自動的に先送りされることとなった。報道（2015.2.19）によれば、EPAの担当理事は、遅れている2014年以降の再生可能燃料使用義務量の見直し案について、この春先に2014-16年の3カ年分をまとめて発表する旨述べた模様。

図-2 米国とうもろこし需給の推移
—2014/15年度の生産量は増加、期末在庫率も大幅に上昇—



資料：USDA「PS&D」（2015.3）等をもとに農林水産省で作成

図-3 米国におけるバイオエタノールの週間生産量（日量平均）の推移



資料：米国エネルギー情報局（EIA）資料（2015.3）をもとに農林水産省で作成

イ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積は増加するものの、華北平原及び東北部で夏の干ばつにより単収が低下することから前年度より減少し、215.5百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が堅調なことから前年度より増加し、216.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、2.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も36.7%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の生産量は、215.5百万トンと前年度(218.5百万トン)より3.0百万トン減少する見込み。これは、2014年7～8月、東北部及び華北平原において過去数十年で最悪と言われる干ばつが発生したため。その後、8月下旬から9月初旬にかけて、降雨量が平年並みに回復したことから、作柄悪化に歯止めが掛かったが、先の干ばつの埋め合わせをするには至らず、河南省及び遼寧省の単収は平年を大きく下回る見込み。一方、黒竜江省、北西部、中央部及び南部では、総じて生育に適した天候に恵まれ、単収は平年を上回る見込み。

2015年3月上旬現在、広西壮族自治区にて2015/16年度のとうもろこしの作付作業が開始されている。

【貿易情報・その他】

中国通関(海関)統計によれば、2015年2月の輸入量は、前年同月比25.7%増の60.3万トンとなった。国別には、米国が1.4万トン(シェア2.3%)、ウクライナが57.4万トン(同95.2%)。また、2015年1～2月の累計輸入量は、前年同期比4.6%増の118.2万トンとなった。国別には、米国が3.4万トン(同2.9%)と前年同期比96.0%減となった一方、ウクライナが104.4万トン(同88.3%)と前年同期比441.1%増となった。

中央一号文件(2015.2.2)に基づき、2015年2月3日、中国共産党の農村政策グループは、臨時買上げ・備蓄政策を廃止し、需給に基づく市場での価格形成を基に農家が生産するスキームへと転換する意向を表明した。同国国家発展改革委員会(NDRC)は、2014年から大豆及び綿花に試験導入した農家への直接払い制度が、大量に積み上がった国家備蓄の削減に有効と判断された場合、導入対象をとうもろこし及び砂糖にも拡大する可能性があるとしている。

報道(2015.3.18)によれば、中国政府は、農地の更なる汚染を回避するため、化学肥料と農薬の年間使用量の増加率を2020年までにゼロに抑える方針を明らかにした。同国は、世界の穀物生産の20%強を占める一方で、化学肥料の使用量は世界の3分の1以上を占めている。その使用量は過去30年間で年間平均5.2%増加し、2013年には5,900万トンに達した。新たな方針では、有機肥料の使用を推進し、化学肥料使用量の年間の伸びを2015～2019年に1%以内に抑え、2020年には0%に止めるとしている。

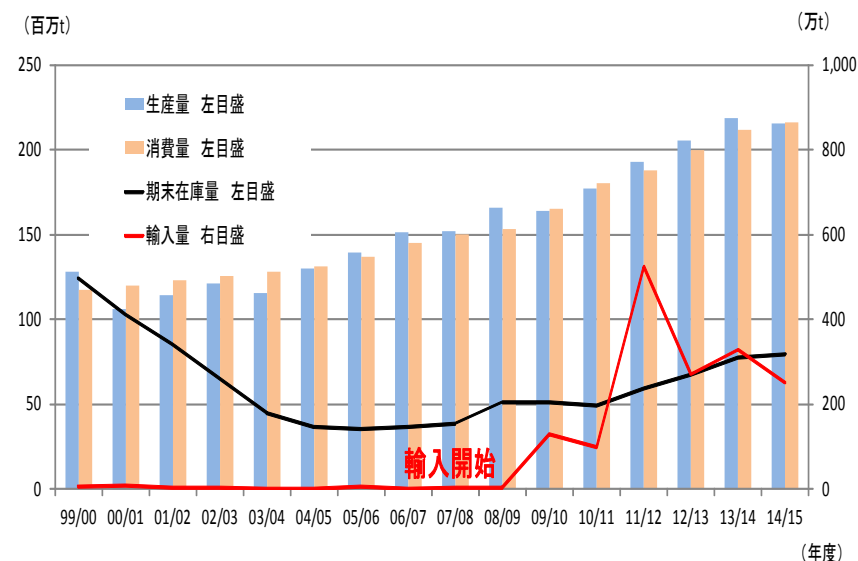
(世界の生産量シェア 2位 (2014/15年度 21.8%))

表－3 中国のとうもろこし需給(市場年度：10月～翌年9月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	205.6	218.5	215.5 (215.7)	-	▲ 1.4	
消 費 量	200.0	212.0	216.0 (214.6)	-	1.9	
うち飼料用	144.0	154.0	158.0 (145.0)	-	2.6	
輸 出 量	0.1	0.0	0.1 (0.2)	-	400.0	
輸 入 量	2.7	3.3	2.5 (2.7)	-	▲ 23.8	
期末在庫量	67.6	77.3	79.2 (85.7)	-	2.5	
期末在庫率	33.8%	36.5%	36.7% (39.9%)	-	0.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	35.03	36.32	37.00 (37.08)	-	1.9	
単収(t/ha)	5.87	6.02	5.82 (5.82)	-	▲ 3.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain : World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」 (10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

図－4 中国産とうもろこしの生産量、消費量、輸入量等の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2015.3) 等をもとに農林水産省で作成

ウ アルゼンチン

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収は上昇するものの、収穫面積が減少することから前年度より減少し、23.5百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、9.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、14.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も4.7%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の輸出量で上方修正、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の実産量、輸出量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の作付作業は2014年9月から開始された。11月中旬、予想外の降雪によりコルドバ州では早植えとうもろこしに被害が発生したものの、その後の良好な天候により作付作業は順調に進捗、2月上旬に作付作業は終了した。ブエノスアイレス穀物取引所週報(2015.3.12)によれば、2015年1月及び2月初旬、主産地では定期的な降雨に恵まれ、土壌水分が潤沢なことから高単収が期待されている。なお、コルドバ州では、3月上旬の降雨による土壌水分過多のため、早植えとうもろこしの収穫に遅れが生じている。エントレリオス州中東部及びサンタフェ州北部では、好天に恵まれ収穫作業が進展している。現時点のアルゼンチン全体の収穫進捗率は3.4%。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(2015.3.10)によれば、2014/15年度の実産量は、前年度(26.0百万トン)より9.6%減少するものの、前月より2.2%上方修正され23.5百万トンとなる見込み。これは、最近の降雨が、ブエノスアイレス州、ラ・パンパ州、コルドバ州西部等で作物の単収を引き上げると見込まれるため。本降雨により、早植えとうもろこしの収穫作業に遅れが生じたものの、作物の大部分は結実期にあり作柄は良好。また、遅植えとうもろこしは、受粉期から結実期初期にあり、土壌水分が十分なため作柄は良好。なお、早植えとうもろこしの収穫進捗率は約10%となっている。

【貿易情報・その他】

アルゼンチン農牧漁業省農畜食糧衛生品質管理センター(SENASA)によれば、2015年1月のとうもろこし輸出量は83万トン。国別には、アルジェリア(12.7万トン)が最も多く、次いでエジプト(10.3万トン)、マレーシア(8.4万トン)となっている。なお、日本向けは1.1万トンとなっている。

報道(2015.3.16)によれば、アルゼンチン政府は近く、中小規模の農家を対象に税制支援などを柱とする基金を創設する。資金規模は約2億8,460万米ドルとなる見込み。

我が国の輸入先国シェア3位(2013年数量ベース13.3%)
世界の生産量シェア7位(2014/15年度2.4%)
世界の輸出量シェア4位(2014/15年度12.4%)

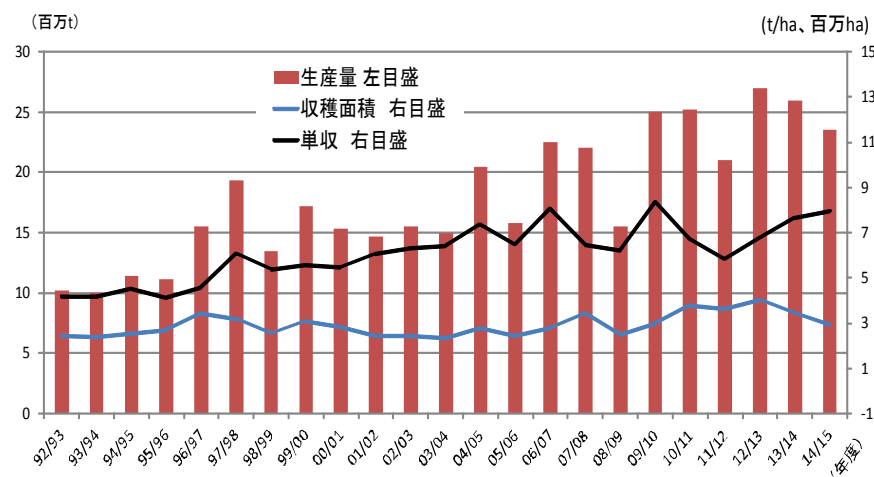
表-4 アルゼンチンのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

(単位: 百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.0	26.0	23.5 (30.0)	0.5	▲ 9.6
消 費 量	7.9	8.8	9.4 (14.3)	-	6.8
うち飼料用	5.3	5.8	6.1 (11.3)	-	5.2
輸 出 量	18.7	17.0	14.5 (16.5)	1.0	▲ 14.7
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	0.0
期末在庫量	1.3	1.5	1.1 (2.0)	▲ 1.0	▲ 25.7
期末在庫率	5.0%	5.9%	4.7% (6.5%)	▲ 4.6	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.00	3.40	2.95 (5.00)	▲ 0.05	▲ 13.2
単収(t/ha)	6.75	7.65	7.97 (6.00)	0.30	4.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC「Grain Market Report」(26 February 2015)

図-5 アルゼンチン産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA「PS&D」(2015.3)等をもとに農林水産省で作成

エ ブラジル

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収、収穫面積共に減少することから前年度より減少し、75.0百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料需要増から前年度より増加し、56.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、20.5百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も23.1%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の実産量、期末在庫量で上方修正、輸出量で下方修正、2014/15年度の実輸出量で上昇修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

夏とうもろこしは、南部を中心に、大豆と競合する8～12月に作付けされ、翌年1～6月に収穫される。冬とうもろこしは、中西部を中心に、早熟種大豆の収穫後2作目として1～3月に作付けされ、7～9月に収穫される。

米国農務省(USDA)によれば、2014年12月を通じてブラジル中央部及び南部の主産地では十分な降雨に恵まれ、夏とうもろこしは順調に生育したが、2015年1月に入り、ゴイアス州、ミナスジェライス州、バイア州南部で季節外れの高温・乾燥型の天候に見舞われ、単収が引き下げられた。その後、適雨に恵まれ単収が改善、現在の作柄は概ね良好となっている。

米国民間調査会社によれば、2015年3月3日時点の夏とうもろこしの収穫進捗率は約40%。冬とうもろこしの作付進捗率は約65%となっている。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の3月報告(2015.3.10)によれば、2014/15年度の夏とうもろこしの作付面積は、6.08百万ヘクタールと前年度(6.62百万ヘクタール)を下回り、生産量も29.7百万トンと前年度(31.7百万トン)を下回る見込み。これは、とうもろこし価格の低迷により収益性の高い大豆に作付けがシフトする傾向にあるため。

また、冬とうもろこしの作付面積は、9.01百万ヘクタールと前年度(9.21百万ヘクタール)を下回るものの、生産量は48.5百万トンと前年度(48.4百万トン)をわずかに上回る見込み。これは、冬とうもろこし主産地である中西部で、前作の大豆の収穫時期の遅れから冬とうもろこしの作付作業に遅れが生じ、作付面積は減少するものの、2015年2月中旬以降の適雨により、単収の上昇が期待されるため。

(⇒大豆のブラジルの項も参照)

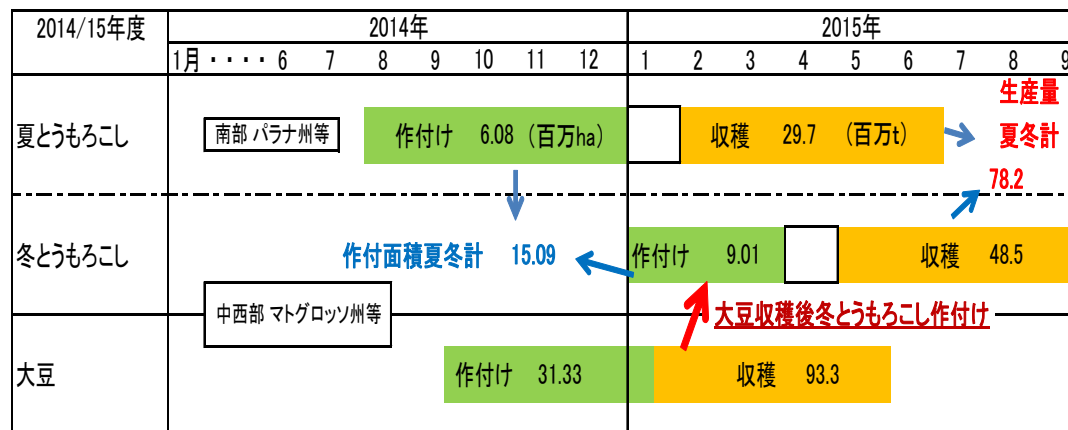
我が国の輸入先国シェア 2位 (2013年数量ベース30.4%)
世界の生産量シェア 3位 (2014/15年度 7.6%)
輸出量シェア 2位 (2014/15年度 17.6%)

表－5 ブラジルのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)
(単位：百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値(CONAB)	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	81.5	80.0	75.0 (78.2)	-	▲ 6.3
消 費 量	52.5	55.0	56.5 (55.0)	-	2.7
うち飼料用	44.5	46.0	47.5 (…)	-	3.3
輸 出 量	25.0	21.0	20.5 (20.5)	1.0	▲ 2.4
輸 入 量	0.9	0.8	0.8 (0.5)	-	0.0
期末在庫量	14.2	19.0	17.8 (17.5)	-	▲ 6.3
期末在庫率	18.3%	24.9%	23.1% (23.1%)	▲ 0.3	▲ 1.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.80	15.80	15.00 (15.09)	-	▲ 5.1
単収(t/ha)	5.16	5.06	5.00 (5.18)	-	▲ 1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
CONAB「Acompanhamento da Safra Brasileira de Grãos」(10 March 2015)

図－6 2014/15年度のとうもろこし、大豆のクロップカレンダー



資料：ブラジル食料供給公社(CONAB)2015年3月報告をもとに農林水産省で作成。
注：カレンダーの帯の中の数量はブラジル全体の作付面積及び生産量。

オ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、74.2百万トンとなる見込み。
消費量は、前年度より増加し、78.5百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より増加し、2.5百万トンとなる見込み。
輸入量は、前年度より減少し、8.0百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も9.4%に上昇する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)によれば、2014/15年度の生産量は74.2百万トンと、前年度(64.3百万トン)を15.4%上回り史上最高となる見込み。2014年6月の作付け以降、総じて平年を上回る降雨に恵まれEU全土の土壌水分量が増加、干ばつ等のストレスを受けることなく理想的な生育環境となった。

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、2015/16年度の作付面積は、フランス、ドイツ等で減少することから、前年度(9.6百万ヘクタール)よりわずかに減少し9.5百万ヘクタールとなる見込み。現在、土壌水分量は十分であり、2015年3月上旬より作付作業が開始される模様。

【その他】

GM作物のEU域内での栽培申請に関し、EUで承認又は承認手続中のGM作物であっても、加盟国が自国での栽培を制限又は禁止することを可能にするため、「GMOの環境への放出に関する指令」の改正案が協議されていた。2014年12月4日、3者(欧州議会、閣僚理事会、欧州委員会)は、GM作物の自国での栽培を禁止したい加盟国に申請者(バイオテク企業)と事前協議を義務付けるかは各国の任意とすること、及び栽培禁止理由は、欧州食品安全機関が判断する健康や安全以外の理由でEUが承認した禁止理由リストに基づくことで暫定合意した。禁止理由には、倫理的な理由、特定の生息地の保全、有機農業、都市計画、社会経済的な影響等が含まれる。同改正案は、2015年1月13日に欧州議会、3月2日に閣僚理事会にて正式承認された。同年4月2日に発効する予定となっている。

2014年9月19日、欧州委員会は、とうもろこしの輸入関税を5.32ユーロ/トンから10.44ユーロ/トンに引き上げる旨を発表した。EUは2010年8月よりとうもろこしの輸入関税を撤廃していたが、国際相場の下落を受け、2014年7月16日に輸入関税を復活させたばかり。

EUでは、2020年までに輸送燃料における再生可能燃料の導入比率を10%に高める目標を掲げているが、穀物由来のバイオ燃料は食料価格の高騰に拍車をかけ、環境面のメリットより悪影響の方が大きいとする認識が強まっていることに対応し、2015年2月24日、欧州議会環境委員会は穀物由来のバイオ燃料の上限比率を6%に制限する立場を採択した。

(世界の生産量シェア 4位 (2014/15年度 7.5%))

表-6 EUのとうもろこし需給(市場年度:10月~翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	58.9	64.3	74.2 (72.6)	-	15.4
消 費 量	69.6	76.5	78.5 (74.7)	-	2.6
うち飼料用	53.0	58.0	59.5 (59.8)	-	2.6
輸 出 量	2.2	2.4	2.5 (3.0)	-	4.2
輸 入 量	11.4	15.9	8.0 (7.0)	-	▲ 49.7
期末在庫量	5.2	6.4	7.6 (18.1)	-	18.1
期末在庫率	7.2%	8.1%	9.4% (23.3%)	-	1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.72	9.74	9.57 (9.71)	-	▲ 1.7
単収(t/ha)	6.06	6.60	7.75 (7.50)	-	17.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
EU「Balance sheets for cereals, oilseeds and rice」(26 February 2015)

写真-2 仏ボルドー地方 作付けを待つとうもろこし畑
(2015年3月10日撮影)



写真提供: Touyeu Yang 氏

カ ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、通貨安に伴う資材コストの上昇による単収低下及び晩夏の高湿・乾燥から前年度より減少し、28.5百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、10.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、生産減に伴い、前年度より減少し、18.0百万トンの見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も8.2%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)によれば、2014/15年度の生産量は、史上最高を記録した前年度(30.9百万トン)に次ぐ28.5百万トンとなる見込み。同国は10年前より輸入ハイブリッド種子を導入しており、今年度のハイブリッド種子の輸入量は前年度に比べ20%増加した。しかしながら、2014年8月、とうもろこし主産地である中央部及び中央南部で高温・乾燥型の天候が続いたことや、現地通貨安を背景に肥料等の輸入資材の調達コストが前年度に比べ25%上昇し、投入量を削減せざるを得なかったことから、単収は低下する見込み。

2015年3月18日、ウクライナ農業政策・食料省は、同日時点の2015/16年度の春穀物の作付面積を前年同期(61.1万ヘクタール)より大幅に下回る23.9万ヘクタール、作付進捗率を10%と発表した。

【貿易情報・その他】

2015年3月5日、パヴレンコ・ウクライナ農相は、中国向けとうもろこしの輸出量の倍増を目指した新協定に関する政府代表団を、2015年4月に中国へ派遣することを発表した。同国は、2012年に中国より供与されたドル借款15億ドルの返済として、同国穀物公社(GPZKU)を通じて中国向けにとうもろこし約1百万トンを輸出し完済した実績がある。2015年は、とうもろこしに加え、鶏肉製品の輸出についても交渉を開始するという。また、欧州向け小麦、とうもろこし、なたね、肉類の輸出増加に関する協議に向けての準備も開始したという。

2015年3月6日、ピヴォワルスキー・ウクライナ・インフラ大臣は、3月5日に貨物輸送料金の値上げに関する省令に署名を行い、約1ヶ月後に25%の値上げが実行される旨、明らかにした。なお、2015年2月1日より、石炭を除く全ての貨物輸送料金が30%値上げされている。

2015年3月11日、ウクライナ農業政策・食料省は、3月11日現在における2014/15年度の穀物輸出量を25.4百万トンと発表した。うち、とうもろこしの輸出量は11.8百万トン。なお、同省は2014/15年度の穀物輸出量について、過去最高の37.0百万トンに達する可能性があるが、同国通貨安を背景に農家がヘッジ目的でとうもろこしを中心に販売を手控えている他、物流網に支障をきたした場合は、32~35百万トンに留まるとの見通しを示した。

我が国の輸入先国シェア	5位	(2013年数量ベース)	4.7%
世界の生産量シェア	5位	(2014/15年度)	2.9%
世界の輸出量シェア	3位	(2014/15年度)	15.4%

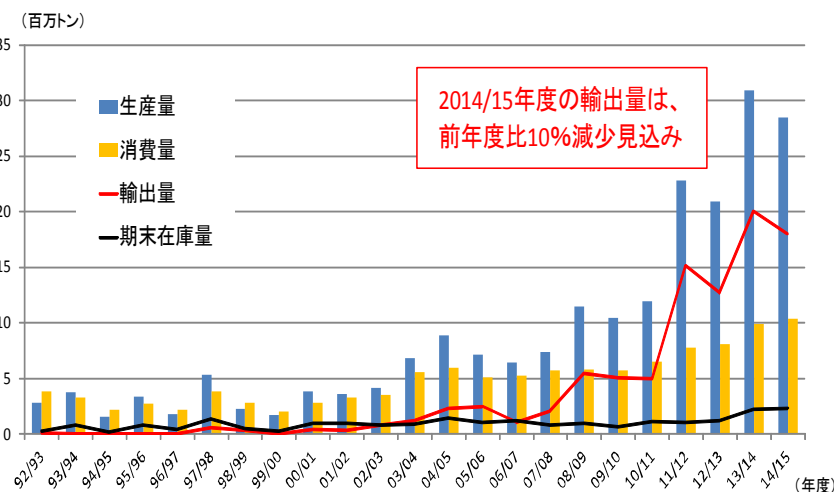
表-7 ウクライナのとうもろこし需給

(市場年度:10月~翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	20.9	30.9	28.5 (28.5)	-	▲ 7.9	
消 費 量	8.1	9.9	10.4 (10.5)	-	5.1	
うち飼料用	6.8	8.5	9.0 (8.5)	-	5.9	
輸 出 量	12.7	20.0	18.0 (18.0)	-	▲ 10.0	
輸 入 量	0.0	0.1	0.1 (0.0)	-	0.0	
期末在庫量	1.2	2.2	2.3 (2.5)	-	4.5	
期末在庫率	5.7%	7.5%	8.2% (8.8%)	-	0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.37	4.83	4.63 (4.62)	-	▲ 4.1	
単収(t/ha)	4.79	6.40	6.15 (6.16)	-	▲ 3.9	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」(26 February 2015)



資料: USDA 「PS&D」(2015.3) 等をもとに農林水産省で作成

3 大麦

(1) 国際的な大麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑

生産量は、ロシア、ウクライナ等で増加するものの、トルコ、カナダ、豪州等で減少することから、世界全体では前年度を下回り、140.7百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、豪州で上方修正された。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

消費量は、EU、カナダ、トルコ等で減少するものの、ロシアで増加することから、世界全体では前年度を上回り、142.3百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、米国でわずかに上方修正、EU、サウジアラビアで下方修正された。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

世界全体の貿易量は、前年度より増加し、25.9百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、EU、ロシア、ウクライナで増加し、アルゼンチン、豪州等で減少する見込み。輸入国では、中国、イラン等で増加し、サウジアラビア等で減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、輸出国ではEU、豪州で上方修正された。輸入国では中国、イランで上方修正、サウジアラビアで下方修正された。

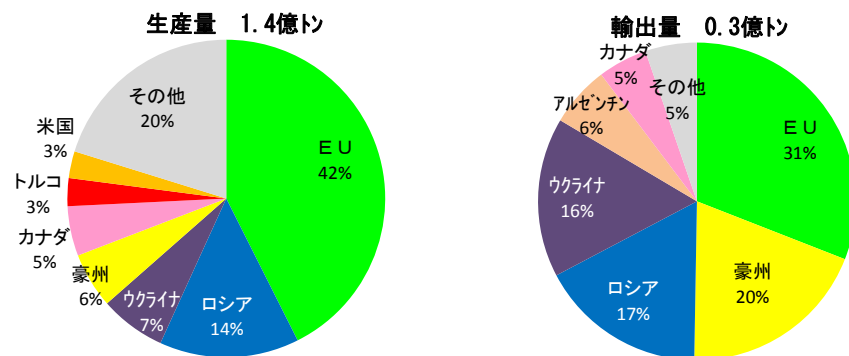
【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↓

期末在庫量は、前年度より減少し、世界全体で23.4百万トンとなる見込み。

国別には、ウクライナ等で積み増しされるものの、カナダ、サウジアラビア等で取り崩される見込み。世界全体の期末在庫率は16.4%と前年度より低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、イランで上方修正、EU、サウジアラビア、米国で下方修正された。

図ー1 世界の大麦のシェア (2014/15年度)



表ー1 世界の大麦需給（米国農務省）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	129.8	145.5	140.7	0.5	▲ 3.3
EU	54.9	59.6	59.9	-	0.5
ロシア	14.0	15.4	20.0	-	30.0
カナダ	8.0	10.2	7.1	-	▲ 30.4
豪州	7.5	9.7	8.0	0.4	▲ 17.8
ウクライナ	6.9	7.6	9.5	-	25.0
トルコ	5.5	7.3	4.0	-	▲ 45.2
米国	4.8	4.7	3.8	-	▲ 18.4
消 費 量	131.7	141.3	142.3	1.0	0.7
うち飼料用	89.0	97.1	95.9	0.6	▲ 1.2
EU	51.0	53.5	52.0	▲ 0.5	▲ 2.8
ロシア	12.1	12.6	14.4	-	14.3
サウジアラビア	8.3	8.0	8.0	▲ 0.5	-
カナダ	6.8	7.7	6.7	-	▲ 13.5
トルコ	6.2	7.0	6.1	-	▲ 12.9
ウクライナ	5.1	5.1	4.9	-	▲ 3.9
米国	4.6	4.8	4.3	0.0	▲ 10.2
貿 易 量 (輸出)	19.6	22.9	25.9	1.8	12.9
EU	4.9	5.7	8.0	1.3	39.3
豪州	4.5	6.2	5.0	0.5	▲ 19.6
アルゼンチン	3.6	2.9	1.6	-	▲ 44.7
ロシア	2.2	2.7	4.4	-	64.1
ウクライナ	2.1	2.5	4.2	-	69.6
カナダ	1.4	1.6	1.3	-	▲ 16.6
カザフスタン	0.2	0.5	0.5	-	-
(輸入)					
サウジアラビア	8.5	9.0	7.5	▲ 0.5	▲ 16.7
中国	2.2	4.9	6.0	1.5	22.7
日本	1.4	1.3	1.3	-	0.5
イラン	1.6	0.9	1.7	0.5	88.9
ヨルダン	0.8	1.0	0.7	-	▲ 35.6
アラブ首長国連邦	0.5	0.6	0.6	-	-
リビア	0.6	0.5	0.6	-	10.0
期 末 在 庫 量	20.8	24.9	23.4	▲ 0.6	▲ 6.3
EU	5.1	5.5	5.5	▲ 0.8	0.5
サウジアラビア	3.0	4.0	3.5	▲ 0.1	▲ 12.8
米国	1.8	1.8	1.6	▲ 0.1	▲ 11.0
イラン	1.7	1.2	1.3	0.1	8.0
カナダ	1.0	1.9	1.1	-	▲ 44.4
アルジェリア	1.2	1.2	1.0	-	▲ 12.6
ウクライナ	0.9	0.9	1.2	-	40.2
期 末 在 庫 率	15.8%	17.7%	16.4%	▲ 0.5	▲ 1.2

資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」
「PS&D」(10 March 2015)

(2) 大麦の主要生産・輸出国等の需給状況

ア 豪州

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、8.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、3.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、5.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より減少するものの、消費量及び輸出量の減少に対して期末在庫量の減少が少ないことから、期末在庫率は8.0%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の実産量、期末在庫量で上方修正、2014/15年度の実産量、輸出量で上方修正、消費量で下方修正された。結果として期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

・2014/15年度の実収穫作業は、2014年12月末にほぼ終了。国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、小麦及びなたねへの作付転換により収穫面積が減少することや、2014年9～10月の乾燥型の天候により単収が平年を下回ることから、生産量は8.0百万トンと記録的な生産量となった前年度を下回る見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Agricultural commodities」(2015.3.3)によれば、2015/16年度の実産量は、より収益性が見込める小麦やなたねが選好されて大麦の作付面積が減少するため、対前年度比6%減の7.5百万トンとなる見込み。

イ カナダ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、7.1百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、6.7百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、1.3百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は13.4%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の作付けは2014年5月から6月半ばに行われ、収穫は2014年10月末にほぼ終了。生産量は、なたね等への作付転換に伴う作付面積の減少や生育及び収穫期間中の冷涼湿潤型の天候による単収低下から、前年度比30.4%減の7.1百万トンとなる見込み。なお、単収は史上最高の前年度を下回ったものの過去5年平均並み。

IGC「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、2015/16年度の作付面積は、作付条件の改善やプレーリー(アルバータ州南東部からマニトバ州南西部の平原)での休耕地減少により、対前年度比12%増の2.4百万ヘクタールとなる見込み。

我が国の輸入先国シェア	1位	(2013年数量ベース66.8%)
世界の生産量シェア	4位	(2014/15年度 5.6%)
輸出量シェア	2位	(2014/15年度 19.3%)

表－2 豪州の大麦需給(市場年度：11月～翌年10月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	7.5	9.7	8.0 (8.0)	0.4	▲ 17.8	
消費量	3.0	3.3	3.0 (…)	▲ 0.3	▲ 9.1	
うち飼料用	1.8	2.0	1.7 (…)	▲ 0.3	▲ 15.0	
輸出量	4.5	6.2	5.0 (6.1)	0.5	▲ 19.6	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	…	
期末在庫量	0.5	0.7	0.6 (…)	0.3	▲ 7.2	
期末在庫率	7.2%	7.3%	8.0% (…)	3.4	0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)※	3.64	3.94	3.80 (3.81)	-	▲ 3.6	
単収(t/ha)	2.05	2.45	2.09 (2.09)	0.09	▲ 14.7	

資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」

「World Agricultural Production」、「PS&D」(10 March 2015)

ABARES「Agricultural commodities」(3 March 2015)(※ABARESは作付面積)

我が国の輸入先国シェア	2位	(2013年数量ベース25.5%)
世界の生産量シェア	5位	(2014/15年度 5.1%)
輸出量シェア	6位	(2014/15年度 5.0%)

表－3 カナダの大麦需給(市場年度：8月～翌年7月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	8.0	10.2	7.1 (7.1)	-	▲ 30.4	
消費量	6.8	7.7	6.7 (6.1)	-	▲ 13.5	
うち飼料用	5.7	6.6	5.5 (5.7)	-	▲ 16.2	
輸出量	1.4	1.6	1.3 (2.2)	-	▲ 16.6	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	177.8	
期末在庫量	1.0	1.9	1.1 (0.9)	-	▲ 44.4	
期末在庫率	11.9%	20.7%	13.4% (10.4%)	-	▲ 7.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.75	2.65	2.14 (2.14)	-	▲ 19.2	
単収(t/ha)	2.91	3.86	3.33 (3.33)	-	▲ 13.7	

資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」

「World Agricultural Production」、「PS&D」(10 March 2015)

AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(17 February 2015)

ウ 米国

我が国の輸入先国シェア3位 (2013年数量ベース 4.0%)
世界の生産量シェア 7位 (2014/15年度 2.7%)

表ー4 米国の大麦需給 (市場年度: 6月～翌年5月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	4.8	4.7	3.8	-	▲ 18.4
消費量	4.6	4.8	4.3	0.0	▲ 10.2
うち飼料用	1.4	1.4	1.0	-	▲ 30.4
輸 出 量	0.2	0.3	0.3	0.0	▲ 16.1
輸 入 量	0.5	0.4	0.5	▲ 0.0	22.8
期末在庫量	1.8	1.8	1.6	▲ 0.1	▲ 11.0
期末在庫率	36.2%	35.2%	35.1%	▲ 2.3	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.33	1.23	0.99	-	▲ 19.6
単収(t/ha)	3.60	3.84	3.89	-	1.3

資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (10 March 2015)

USDA 「Feed Outlook」 (2015.3.12)によれば、2014/15年度(2014年6月～)の輸出力は、2015年1月末時点で累計19.4万トン(対前年同期比8.1%減)。国別には、日本7.2万トン、メキシコ4.5万トン等。

エ ウクライナ

我が国の輸入先国シェア4位 (2013年数量ベース 3.7%)
世界の生産量シェア 3位 (2014/15年度 6.7%)
輸出力シェア 4位 (2014/15年度 16.2%)

表ー5 ウクライナの大麦需給 (市場年度: 7月～翌年6月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.9	7.6	9.5 (9.5)	-	25.0
消費量	5.1	5.1	4.9 (5.3)	-	▲ 3.9
うち飼料用	3.5	3.4	3.3 (3.8)	-	▲ 2.9
輸 出 量	2.1	2.5	4.2 (4.2)	-	69.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	▲ 80.0
期末在庫量	0.9	0.9	1.2 (0.8)	-	40.2
期末在庫率	12.1%	11.7%	13.6% (8.1%)	-	1.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	3.29	3.23	3.20 (3.00)	-	▲ 0.9
単収(t/ha)	2.11	2.34	2.95 (3.15)	-	26.1

資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

ウクライナ農業政策・食料省によれば、2014/15年度(2014年7月～)の輸出力は2015年3月19日時点で累計4.0百万トン。3月20日時点の春大麦の作付済面積は28.7万ヘクタール、作付進捗率は15%。

オ EU

世界の生産量シェア 1位 (2014/15年度 42.6%)
輸出力シェア 1位 (2014/15年度 30.9%)

表ー6 EUの大麦需給 (市場年度: 7月～翌年6月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	54.9	59.6	59.9 (60.0)	-	0.5
消費量	51.0	53.5	52.0 (48.7)	▲ 0.5	▲ 2.8
うち飼料用	35.5	38.0	36.5 (36.4)	▲ 0.5	▲ 3.9
輸 出 量	4.9	5.7	8.0 (9.0)	1.3	39.3
輸 入 量	0.1	0.0	0.1 (0.1)	-	127.3
期末在庫量	5.1	5.5	5.5 (9.6)	▲ 0.8	0.5
期末在庫率	9.1%	9.3%	9.2% (16.6%)	▲ 1.5	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.53	12.36	12.44 (12.39)	-	0.6
単収(t/ha)	4.38	4.83	4.82 (4.8)	-	▲ 0.2

資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (10 March 2015)
EU 「Balance Sheets For Cereals and Oilseeds and Rice」 (26 February 2015)

IGC 「Grain Market Report」 (2015.2.26)によれば、2015/16年度の作付面積は、冬大麦は前年度並みとなるものの春大麦は前年度を下回ることから、12.3百万ヘクタールとなる見込み。

カ ロシア

世界の生産量シェア 2位 (2014/15年度 14.2%)
輸出力シェア 3位 (2014/15年度 17.0%)

表ー7 ロシアの大麦需給 (市場年度: 7月～翌年6月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	14.0	15.4	20.0 (20.0)	-	30.0
消費量	12.1	12.6	14.4 (13.4)	-	14.3
うち飼料用	7.7	8.2	9.5 (9.0)	-	15.9
輸 出 量	2.2	2.7	4.4 (4.0)	-	64.1
輸 入 量	0.3	0.1	0.1 (0.2)	-	▲ 28.1
期末在庫量	0.7	1.0	2.3 (3.3)	-	133.6
期末在庫率	5.1%	6.4%	12.1% (18.7%)	-	5.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.63	8.02	8.80 (9.19)	-	9.7
単収(t/ha)	1.83	1.92	2.27 (2.17)	-	18.2

資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (10 March 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (26 February 2015)

ロシア税関データによれば、2014/15年度(2014年7月～)の輸出力は、2015年3月11日時点で累計4.0百万トン。また、ロシア農業省(2015.3.4)によれば、南部の産地では春作物の作付けを開始。

4 米

(1) 国際的な米需給の概要（詳細は右表を参照）

〈米国農務省（USDA）の見通し〉

【生産量】 **2014/15年度** 前年度比 ↓ 前月比 ↑
生産量は、中国等で増加するものの世界第2位の生産国であるインド等で減少することから、世界全体では減少し、474.9百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、インドで上方修正、タイで下方修正された。

【消費量】 **2014/15年度** 前年度比 ↑ 前月比 ↑
消費量は、中国、インドネシア等で前年度より増加することから、世界全体では増加し、史上最高の483.7百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、中国、インド、バングラデシュで上方修正された。

【貿易量】 **2014/15年度** 前年度比 ↑ 前月比 ↑
世界全体の貿易量は、前年度より増加し、42.6百万トンとなる見込み。
輸出国では、パキスタン、ベトナム等で増加、インド等で減少する見込み。一方、輸入国では、ナイジェリア、フィリピン等で増加、EUで減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、輸出国では、インド、ミャンマーで上方修正、米国でわずかに上方修正、カンボジアで下方修正、輸入国では、中国で上方修正、イラクで下方修正された。

【期末在庫量】 **2014/15年度** 前年度比 ↓ 前月比 ↓
期末在庫量は、フィリピン、米国等で増加するものの、インド、タイ等で減少することから、世界全体では前年度より減少し、97.6百万トンとなり、期末在庫率も20.2%と低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、タイで下方修正、米国でわずかに下方修正された。

図-1 世界の米のシェア（2014/15年度）

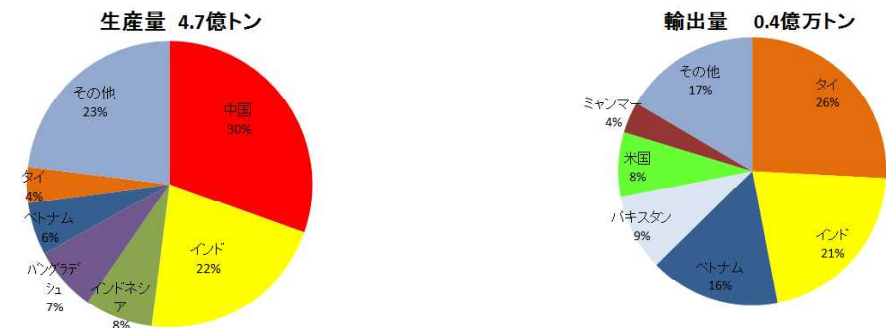


表-1 世界の米需給（米国農務省）

（単位：百万精米トン）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	472.0	477.1	474.9	0.3	▲ 0.5
中国	143.0	142.5	144.5	-	1.4
インド	105.2	106.5	102.5	0.5	▲ 3.8
インドネシア	36.6	36.3	36.5	-	0.6
バングラデシュ	33.8	34.4	34.6	-	0.6
ベトナム	27.5	28.2	28.3	-	0.3
タイ	20.2	20.5	19.2	▲ 0.4	▲ 6.4
ミャンマー	11.7	12.0	12.2	-	1.6
消 費 量	468.7	480.8	483.7	0.6	0.6
中国	144.0	146.3	148.4	0.4	1.4
インド	94.0	99.2	99.4	0.2	0.2
インドネシア	38.1	38.5	39.2	-	1.8
バングラデシュ	34.5	34.9	35.3	0.1	1.1
ベトナム	21.9	22.0	21.9	-	▲ 0.5
フィリピン	12.9	12.9	13.2	-	2.7
タイ	10.6	10.9	10.9	-	0.2
貿 易 量 (輸出)	39.4	42.3	42.6	0.4	0.7
インド	10.9	10.2	9.0	0.3	▲ 11.3
タイ	6.7	11.0	11.0	-	0.3
ベトナム	6.7	6.3	6.7	-	5.8
パキスタン	3.6	3.4	3.9	-	14.7
米国	3.4	3.0	3.3	0.0	11.4
ミャンマー	1.2	1.7	1.6	0.1	▲ 3.6
カンボジア	1.1	1.0	1.1	▲ 0.1	10.0
(輸入)					
ナイジェリア	2.8	2.8	3.5	-	25.0
中国	3.1	4.0	4.4	0.4	9.5
イラン	2.1	1.7	1.7	-	3.0
フィリピン	1.4	1.2	1.6	-	33.3
インドネシア	0.7	1.2	1.3	-	5.7
EU	1.4	1.5	1.5	-	▲ 2.0
イラク	1.4	1.0	1.3	▲ 0.2	31.6
期末在庫量	110.2	106.5	97.6	▲ 0.6	▲ 8.3
中国	46.8	46.8	46.9	-	0.2
インド	25.4	22.7	16.8	-	▲ 25.8
タイ	12.8	11.7	9.3	▲ 0.4	▲ 20.9
インドネシア	6.5	5.5	4.1	-	▲ 25.5
日本	2.7	2.8	2.8	-	▲ 0.7
フィリピン	1.5	1.7	2.3	-	35.3
米国	1.2	1.0	1.3	▲ 0.0	27.2
期末在庫率	23.5%	22.1%	20.2%	▲ 0.1	▲ 2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「PS&D」(10 March 2015)

(2) 米の主要生産・輸出国等の需給状況

ア インド

【需給状況】（詳細は右表を参照）

〈米国農務省の見通し〉

生産量は、収穫面積が減少すること及び単収が低下することから、前年度より減少し、102.5百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、99.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、9.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も15.5%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2014/15年度の生産量、消費量、輸出量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

インド農業省は、3月5日現在、2014/15年度のラビ米（乾季米）の作付面積が3.2百万ヘクタール（前年3.7百万ヘクタール）に達したと公表。

米国農務省（USDA）「World Agricultural Production」（March 2015）及び「Rice Outlook」（2015.3.12）によれば、インドの2014/15年度の実産量は、ラビ米の生産が増加することから前月から0.5百万トン上方修正され、102.5百万トンとなる見込み。

現在栽培されているラビ米（乾季米）の実産量は、前月から上方修正されたにも関わらず、モンスーン期到来の遅れにより、収穫面積が減少したこと、前年に比べて約4%の減少し、13百万トンとなる見込み。

ラビ米は、灌漑施設が整備された地域で冬の季節（乾季）の11月～翌3月に栽培されるため、降雨への依存度が高いカリフ米（雨季米）よりも単収は高い。主な産地は、インドの南部から東部にかけての、西ベンガル州、アンドラ・プラデシュ州、オリッサ州、カルナタカ州、アッサム州とタミル・ナド州等であり、これらの各州でのラビ米の作付けは終了し、天候が平年並で土壌水分が確保されていることから、生育は良好となっている。収穫は2015年3月から始まる予定。

一方、カリフ米の収穫は既に終了しており、生産量は約89.5百万トンとなる見込み。インドの米の約85%を占めるカリフ米は、主にインド北部のパンジャーブ州、ハリヤナ州およびウッタル・プラデシュ州で南西モンスーン期の5月～9月に栽培される。カリフ米の約50%は、運河や地下水をポンプでくみ上げた水を利用して栽培される。

【輸出入その他】

インド農業省（2015.2.18）は、インドの2014/15年度の穀物の生産量を前年（265.6百万トン）から8.5百万トン減少の257.1百万トンと予測。うち米の生産量は、前年（106.7百万トン）から3.7百万トン減少の103.0百万トンと予測。

（世界の生産量シェア 2位（2014/15年度 21.6%）
輸出量シェア 2位（2014/15年度 21.1%）

表－2 インドの米需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	105.2	106.5	102.5 (104.0)	0.5	▲ 3.8	
消 費 量	94.0	99.2	99.4 (99.1)	0.2	0.2	
輸 出 量	10.9	10.2	9.0 (8.0)	0.3	▲ 11.3	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	...	
期末在庫量	25.4	22.7	16.8 (20.5)	-	▲ 25.8	
期末在庫率	24.3%	20.7%	15.5% (19.1%)	▲ 0.1	▲ 5.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	42.41	43.94	43.00 (...)	▲ 0.50	▲ 2.1	
単収(もみt/ha)	3.72	3.64	3.58 (...)	0.06	▲ 1.6	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、 「PS&D」、
「World Agricultural Production」 (10 March 2015)
FAO 「Food Outlook (October 2014)」

写真－1 インド北部ハリヤナ州 公設競り市場
取引前のバスマティ米の山



イ タイ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

〈米国農務省の見通し〉

生産量は、収穫面積の減少及び単収の低下から19.2百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度並みの10.9百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度並みの11.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率は42.3%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2014/15年度の生産量が下方修正された。結果として期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及作柄】

農業市場情報システム(AMIS)「Market Monitor」(March 2015)によれば、雨季米の収穫は終了。適量の降水量のため生産量が多いと見込まれる。乾季米は、中央および東部の水不足により、作付面積は前年に比べて大幅に減少。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(March 2015)及び「Rice Outlook」(2015.3.12)によれば、2014/15年度の実産量は、前月から0.4百万トン下方修正され、19.2百万トン（前年度比6.4%減）となる見込み。また、収穫面積も前月から0.10百万ヘクタール下方修正され、10.40百万ヘクタール（前年比4.8%減）と、生産量及び収穫面積は2006/07年以降の低水準となると見られる。これは、政府による灌漑用水の利用制限や、米価格の低迷により、生産者が乾季米の作付けを減少させているため。

タイの乾季米は、生産量の25～30%を占め、通常は3月～6月にかけて収穫され、近年の収穫面積は平均で約0.2百万ヘクタール。乾季米のほとんどが灌漑施設が整備された地域で栽培されるため、単収は雨季米より高い。

【貿易情報その他】

AMIS「Market Monitor」(March 2015)によれば、政府は2015年2月18日に乾季米の生産地域を含む8つの行政区に影響を及ぼした干ばつの被害のため、78億タイバーツ（2億4,000万ドル）の緊急予算を承認。

タイ産米は、2014年5月にタイ軍事政権（国家平和秩序評議会：NCP0）による米の在庫量と品質の検査のため、政府在庫米からの輸出が停止。需給が逼迫したためタイ産米の価格は一時上昇した。政府による検査が終了後、再び政府在庫米を放出を推進するため、2015年8月や9月に入札会や政府間取引等を実施。価格は低下している。

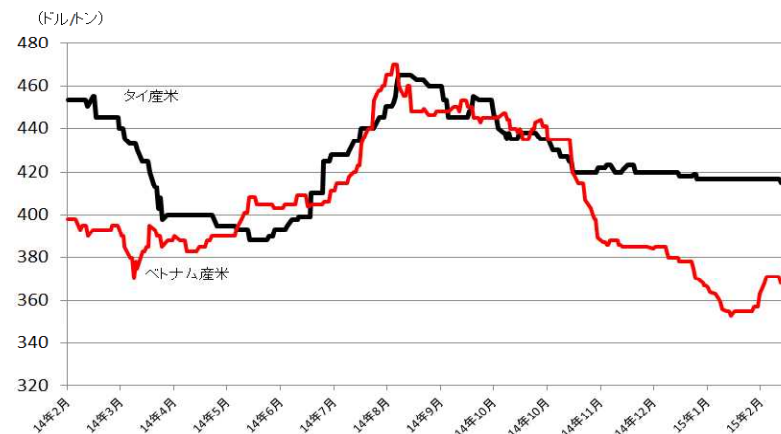
世界の生産量シェア 6位（2014/15年度 4.0%）
輸出量シェア 1位（2014/15年度 25.8%）

表－3 タイの米需給（市場年度：翌年1月～翌年12月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.2	20.5	19.2 (24.8)	▲ 0.4	▲ 6.4
消 費 量	10.6	10.9	10.9 (16.0)	－	0.2
輸 出 量	6.7	11.0	11.0 (10.6)	－	0.3
輸 入 量	0.6	0.3	0.3 (0.3)	－	0.0
期末在庫量	12.8	11.7	9.3 (16.5)	▲ 0.4	▲ 20.9
期末在庫率	74.0%	53.6%	42.3% (62.0%)	▲ 1.6	▲ 11.3

(参考)
収穫面積(百万ha) 10.84 10.92 10.40 (…)
単収(もみt/ha) 2.82 2.84 2.79 (…)
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

図－2 タイ産とベトナム産の輸出価格（FOB）（3月17日現在）



資料：IGC資料をもとに農林水産省で作成

注：1) タイ産米は丸米2等(精米)、ベトナム産米は碎米混入率5%（精米）。

2) タイ、ベトナムで輸出される米の上位のグレードで比較。

ウ ベトナム

【需給状況】（詳細は右表を参照）

（米国農務省の見通し）

生産量は、前年度より増加し、28.3百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、21.9百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、6.7百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より増加し、0.4百万トンとなる見込み。

期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率も3.7%と上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、行われていない。

【生育進捗状況】

農業市場情報システム（AMIS）「Market Monitor」（March 2015）によれば、生育は全体に良好。乾季米の作付けは、気温が高く灌漑用水が十分であることから、前年度を上回るペースで進んでいる。

【輸出その他】

ベトナム税関データによれば、2015年2月の輸出量は、対前年同月比59.0%減、対前月（2015年1月）比46.3%減の17.5万トンとなっている。アフリカ諸国への輸出量が大幅に減少したためと見られている。

AMIS「Market Monitor」（March 2015）によれば、政府は、2015年2月13日、主要な冬春作のうち1.0百万トンを国内を維持させるために備蓄する旨公表。備蓄は、2015年3月の上旬から行い6週間続けられる。

世界の生産量シェア 5位（2014/15年度 5.9%）
輸出量シェア 3位（2014/15年度 15.7%）

表－4 ベトナムの米需給（市場年度：翌年1月～翌年12月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.5	28.2	28.3 (29.7)	-	0.3	
消 費 量	21.9	22.0	21.9 (22.8)	-	▲ 0.5	
輸 出 量	6.7	6.3	6.7 (6.9)	-	5.8	
輸 入 量	0.1	0.3	0.4 (0.5)	-	33.3	
期末在庫量	0.9	1.0	1.1 (5.7)	-	5.0	
期末在庫率	3.0%	3.5%	3.7% (19.2%)	-	0.1	

（参考）

収穫面積(百万ha)	7.86	7.79	7.77 (…)	-	▲ 0.3
単収(もみt/ha)	5.60	5.79	5.82 (…)	-	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

写真－2 ベトナムメコン川流域

－登熟期の2014/15年産の冬春作－ （2015.2.13撮影）



写真提供：Agricultural Extension Center of Dong Thap

図－3 米クロップカレンダー

区 分	2014年												2015年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ベトナム（北部冬春作）													作付											収穫
（南部冬春作）													作付			収穫								
（夏秋作）					作付					収穫														

資料：米国農務省、FAO他

※地域によってずれる場合がある。

エ 中国

【需給状況】

世界の生産量シェア 1位 (2014/15年度 30.4%)
輸入量シェア 1位 (2014/15年度 11.0%)

表－5 中国の米需給 (市場年度：7月～翌年6月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	143.0	142.5	144.5 (141.7)	－	1.4
消費量	144.0	146.3	148.4 (142.0)	0.4	1.4
輸出量	0.3	0.3	0.4 (0.4)	－	53.8
輸入量	3.1	4.0	4.4 (3.0)	0.4	9.5
期末在庫量	46.8	46.8	46.9 (102.1)	－	0.2
期末在庫率	32.4%	31.9%	31.5% (70.2%)	▲ 0.1	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.14	30.31	30.31 (…)	－	0.0
単収(もみt/ha)	6.78	6.72	6.81 (…)	－	1.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO 「Food Outlook (October 2014)」

【生育進捗状況】

2014/15年度の米の収穫は2014年12月末には終了。

中国国家統計局は、2014/15年度の米の生産量(粳ベース)を206.4百万トンと公表。

2015/16年度の米作は、2015年3月上旬現在、華南の早期米が播種から出芽期となっている。

【輸出入その他】

中国税関総署によれば、2015年1月の中国の米輸入量は、12.2万トンで、前月に比べて19.9万トンの減少となった。

中華人民共和国国家発展改革委員会(2015.2.4)は、2015/16年度の米の政府最低買上保証価格が前年度と同じ価格になると公表。2015年5月頃から収穫されるの早期インディカ米(三等)の政府最低買上保障価格は、1.35元(25.65円)/500gに設定。

ミャンマー米連合会(MRF: Myanmar Rice Federation)によれば、MRFは、中国の中糧集团有限公司(COFCO)との間で、2015年2月以降、毎月10万トンの白米を輸出する契約に合意。

オ 米国

【需給状況】

世界の輸出量シェア 5位 (2014 /15年度 7.8%)

表－6 米国の米需給 (市場年度：8月～翌年7月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.3	6.1	7.1 (7.0)	－	15.5
消費量	3.8	4.0	4.2 (4.1)	－	4.8
輸出量	3.4	3.0	3.3 (3.4)	0.0	11.4
輸入量	0.7	0.7	0.7 (0.7)	－	0.0
期末在庫量	1.2	1.0	1.3 (1.2)	▲ 0.0	27.2
期末在庫率	16.1%	14.7%	17.4% (16.0%)	▲ 0.5	2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.08	1.00	1.18 (…)	－	18.0
単収(もみt/ha)	8.37	8.62	8.49 (…)	－	▲ 1.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO 「Food Outlook (October 2014)」

【生育進捗状況】

2014/15年度の米の収穫は2014年11月末には終了。

米国農務省(USDA)「Rice Outlook」(2015.3.12)によれば、米国の生産量は、7.1百万トン(対前年度比15.5%増)となる見込み。生産量の増加は、前年度に比べて収穫面積が増加したためと見られている。長粒種の生産量は、5.2百万トン(対前年度比23%増)。長粒種の殆どが南部で生産されている。また中短粒種の生産量は、1.9百万トン(対前年度比1%増)となる見込み。

写真－3

米国アーカンソー州スタットガード
－水稻収穫後のほ場－



国際穀物理事会(IGC)(2015.2.24 DAILY)によれば、米太平洋海事協会(PMA)と米西海岸港湾労組(ILWU)は、29の米国西海岸のすべての港湾の労使契約について、新たな5年契約で暫定合意に達した。暫定合意の詳細は公表されていないが、この契約により港湾作業は、完全に活動を再開することが出来る。

写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH

カ フィリピン

【需給状況】

表－7 フィリピンの米需給（市場年度：7月～翌年6月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	11.4	11.9	12.2 (12.2)	－	2.9
消費量	12.9	12.9	13.2 (13.7)	－	2.7
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (…)	－	…
輸 入 量	1.4	1.2	1.6 (1.7)	－	33.3
期末在庫量	1.5	1.7	2.3 (2.2)	－	35.3
期末在庫率	0.1	0.1	0.2 (…)	－	4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.70	4.80	4.89 (…)	－	1.9
単収(もみt/ha)	3.86	3.92	3.96 (…)	－	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

国際穀物理事会（IGC）（2015. 1. 21 DAILY）によれば、フィリピン農政省は、2015年の生産は、20百万トン（前年比5%増）に計画。

キ インドネシア

【需給状況】

【世界の生産量シェア 3位（2014/15年度 7.7%）】

表－8 インドネシアの米需給（市場年度：翌年1月～翌年12月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	36.6	36.3	36.5 (44.0)	－	0.6
消費量	38.1	38.5	39.2 (46.3)	－	1.8
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (…)	－	…
輸 入 量	0.7	1.2	1.3 (1.0)	－	5.7
期末在庫量	6.5	5.5	4.1 (5.3)	－	▲ 25.5
期末在庫率	17.0%	14.3%	10.5% (…)	－	▲ 3.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.19	12.10	12.16 (…)	－	0.5
単収(もみt/ha)	4.72	4.72	4.73 (…)	－	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

インドネシア統計局（2014. 3. 2）は、2014年度の生産量を70.8百万トン（粳ベース）と予測。

ク ブラジル

【需給状況】

表－9 ブラジルの米需給（市場年度：翌年4月～翌々年3月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	8.0	8.3	8.3 (8.1)	－	0.0
消費量	7.9	7.9	7.9 (7.8)	－	0.0
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.0)	－	0.0
輸 入 量	0.6	0.7	0.7 (0.7)	－	0.0
期末在庫量	0.5	0.7	0.9 (0.8)	－	27.4
期末在庫率	6.1%	8.3%	10.6% (…)	－	2.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.39	2.40	2.40 (…)	－	0.0
単収(もみt/ha)	4.95	5.09	5.09 (…)	－	0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

国際穀物理事会（IGC）（2015. 2. 26 DAILY）によれば、米の収穫が3月中旬にピークに達するが、トラック業者の妨害行動によりディーゼル燃料の輸送が妨げられ、収穫作業に影響が出た模様。

ケ 豪州

【需給状況】

表－10 豪州の米需給（市場年度：翌年3月～翌々年2月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はFAO	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	0.8	0.6	0.5 (0.6)	－	▲ 16.0
消費量	0.4	0.4	0.4 (0.3)	－	0.8
輸 出 量	0.4	0.4	0.4 (0.5)	－	▲ 9.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.2)	－	▲ 9.1
期末在庫量	0.2	0.2	0.1 (0.2)	0.0	▲ 51.5
期末在庫率	30.1%	25.8%	13.2% (…)	4.6	▲ 12.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	0.11	0.08	0.07 (…)	－	▲ 7.9
単収(もみt/ha)	10.18	10.96	10.00 (…)	－	▲ 8.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
FAO「Food Outlook (October 2014)」

豪州農業資源経済科学局（ABARES）「Australian crop report」（2014. 2. 10）によれば、2014/15年度の生産量は、0.7百万トン（粳ベース）になる見通し。

Ⅱ 油糧種子

1 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省(USDA)の見通し>

【生産量】 **2014/15年度** 前年度比 **↑** 前月比 **—**

生産量は、米国、ブラジル、アルゼンチンで収穫面積、単収共に増加し史上最高となること、大豆がとうもろこしに比べ価格優位にあること等から、世界全体では前年度を上回り、史上最高の315.1百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【消費量】 **2014/15年度** 前年度比 **↑** 前月比 **↓**

消費量は、インドで減少するものの、中国、アルゼンチン等で増加することから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の288.5百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体でわずかに下方修正され、国別には、メキシコでわずかに上方修正、インドで下方修正された。

【貿易量】 **2014/15年度** 前年度比 **↑** 前月比 **↑**

世界全体の貿易量は、前年度より増加し、117.4百万トンとなる見込み。国別には、輸出国では米国等で増加し、ブラジルで減少する見込み。輸入国では中国、メキシコ等で増加し、EUで減少する見込み。

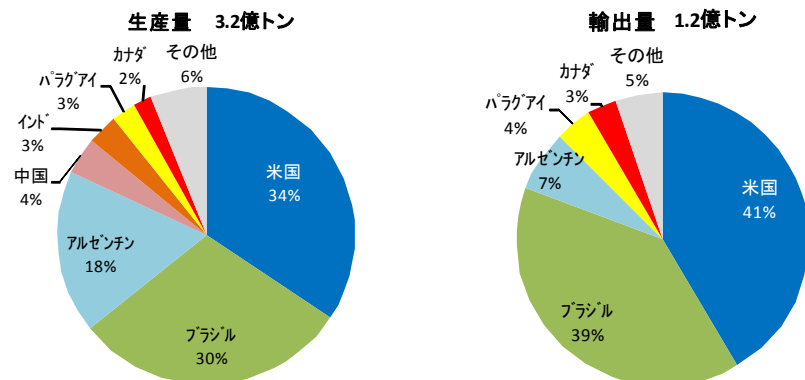
なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、輸出国ではパラグアイで上方修正、輸入国ではメキシコで上方修正された。

【期末在庫量】 **2014/15年度** 前年度比 **↑** 前月比 **↑**

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では89.5百万トンとなる見込み。国別には、中国で在庫が取り崩されるものの、ブラジル、米国、アルゼンチン等で積み増しされる見込み。期末在庫率は31.0%と前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、中国、トルコで上方修正、ブラジルで下方修正された。

図－1 世界の大豆のシェア（2014/15年度）



表－1 世界の大豆需給（米国農務省）

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	268.8	283.7	315.1	—	11.0
米国	82.8	91.4	108.0	—	18.2
ブラジル	82.0	86.7	94.5	—	9.0
アルゼンチン	49.3	54.0	56.0	—	3.7
中国	13.1	12.2	12.4	—	1.2
インド	12.2	9.5	10.5	—	10.5
パラグアイ	8.2	8.2	8.5	—	3.7
カナダ	5.1	5.4	6.1	—	12.9
消 費 量	261.2	273.0	288.5	▲ 0.0	5.7
うち搾油用	230.2	240.9	254.2	▲ 0.3	5.5
中国	76.2	80.3	86.2	—	7.3
米国	48.8	49.9	52.0	—	4.3
アルゼンチン	36.1	39.0	42.3	—	8.5
ブラジル	38.2	39.3	40.8	—	3.7
EU	14.0	14.2	14.3	—	0.8
インド	11.8	9.9	9.7	▲ 0.5	▲ 2.0
メキシコ	3.7	4.1	4.3	0.0	5.4
貿 易 量 (輸出)	100.5	113.0	117.4	0.2	3.9
ブラジル	41.9	46.8	46.0	—	▲ 1.8
米国	35.9	44.8	48.7	—	8.7
アルゼンチン	7.7	7.8	8.0	—	2.0
パラグアイ	5.5	4.8	4.8	0.3	0.0
カナダ	3.5	3.5	3.7	—	6.6
(輸入)					
中国	59.9	70.4	74.0	—	5.2
EU	12.5	13.0	12.8	—	▲ 1.8
メキシコ	3.4	3.8	4.1	0.1	5.5
日本	2.8	2.9	2.9	—	0.3
台湾	2.3	2.3	2.4	—	0.6
タイ	1.9	1.8	2.0	—	11.2
インドネシア	1.8	2.2	2.4	—	4.9
期 末 在 庫 量	57.4	66.3	89.5	0.3	35.0
アルゼンチン	21.8	29.0	34.7	—	19.7
ブラジル	15.3	16.5	24.6	▲ 0.3	48.7
中国	12.4	14.4	14.3	0.1	▲ 0.7
米国	3.8	2.5	10.5	—	319.2
トルコ	0.5	0.4	0.4	0.0	7.4
期 末 在 庫 率	22.0%	24.3%	31.0%	0.1	6.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)

(2) 大豆の主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収、収穫面積共に増加することから、史上最高の108.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、52.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、48.7百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より大幅に増加(+319.2%)し、期末在庫率も10.4%と大幅に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の作付けは2014年5月初旬から開始された。頻繁な降雨により作業は遅れがちであったが、5月後半から好天に恵まれ作付作業は急ピッチで進捗、6月末までに作付作業を終了した。6月下旬、北部産地では多雨により大豆畑が浸水する被害が出るなど作柄の悪化が懸念されたが、その後は総じて好天に恵まれ作柄は極めて良好となった。11月末日までに収穫作業は終了した。

米国農務省(USDA)によれば、2014/15年度の大豆生産量の最終予測は、108.0百万トンと前年度を18.2%上回り史上最高の見込み。生育期間を通して好天に恵まれ、単収は史上最高の3.21トン/ヘクタールを記録した。州別には、主産地のイリノイ州、インディアナ州、オハイオ州の他、13州で史上最高を記録した。

【その他】

2015年2月11日、米国農務省(USDA)は向こう10年間の長期予測(ベースライン予測)を発表した。2015/16年度の大豆の作付面積は、34.0百万ヘクタールと2014/15年度(34.1百万ヘクタール)を0.2%下回る見通し。その後、作付面積は2024/25年度まで31.6百万～32.0百万ヘクタールと横ばいで推移する見通し。これは、近年の大豆価格の低迷による収益性の低下により、農家の大豆に対する生産意欲が薄れると見られていることによる。単収は概ね順調に上昇することから、2015/16年度の生産量は104.0百万トンと2014/15年度(107.7百万トン)を3.5%下回り、2016/17年度は98.8百万トンと更に減少するが、2017/18年度以降は年々増加し、2024/25年度には106.7百万トンまで増加する見通し。

報道(2015.1.28)によれば、米国環境保護局(EPA)は2015年1月27日、アルゼンチン的大豆油由来のディーゼル油が米国の再生可能燃料識別番号(RIN)制度の対象になる事を認める決定をした。2007年エネルギー法の下、再生可能燃料基準(RFS)で消化義務数量が定められ、精製業者は求められる混合率が満たせない場合、RINの購入が義務付けられているが、アルゼンチン産のバイオ燃料は今までRINの対象に含まれていなかった。

我が国の輸入先国シェア 1位 (2013年数量ベース60.1%)
世界の生産量シェア 1位 (2014/15年度 34.3%)
輸出量シェア 1位 (2014/15年度 41.5%)

表-2 米国の大豆需給（市場年度：9月～翌年8月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	82.8	91.4	108.0	-	18.2
消 費 量	48.8	49.9	52.0	-	4.3
うち搾油用	46.0	47.2	48.9	-	3.5
輸 出 量	35.9	44.8	48.7	-	8.7
輸 入 量	1.1	2.0	0.7	-	▲ 65.1
期末在庫量	3.8	2.5	10.5	-	319.2
期末在庫率	4.5%	2.6%	10.4%	-	7.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.82	30.86	33.61	-	8.9
単収(t/ha)	2.69	2.96	3.21	-	8.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)

写真：アイオワ州 収穫後の大豆が保管される穀物倉庫



イ ブラジル

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、前年度より増加し、史上最高の94.5百万トンとなる見込み。
消費量は、前年度より増加し、40.8百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より減少し、46.0百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も28.3%に上昇する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は、輸入量で下方修正された。結果として、
期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄等】

ブラジル食料供給公社(CONAB)の3月報告(2015.3.10)によれば、2014/15年度は、作付面積が31.33百万ヘクタール、単収が2.98トン/ヘクタールと、いずれも前年度を上回ることから、生産量は93.3百万トンと前年度(86.1百万トン)を8.3%上回り、3年連続で史上最高を更新する見込み。

報道(2015.2.18-3.5)によれば、2015年2月18日、トラック運送業者はディーゼル油価格の高騰に抗議するとして、マトグロッソ州からパラナ州へと南北に伸びる幹線道路を遮る妨害行動を開始した。大豆などの穀物輸送に支障が出た他、一部の産地ではトラクター等の農機具用のディーゼル油が不足するなどの影響が出たが、3月4日頃までに妨害行為はほぼ終結した。

ウ アルゼンチン

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、前年度より増加し、史上最高の56.0百万トンとなる見込み。
消費量は、前年度より増加し、42.3百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より増加し、8.0百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も69.1%に上昇する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

アルゼンチン農牧漁業省「Estimaciones Agrícolas」(2015.2.19)によれば、2014/15年度の作付面積は前年度比1.1%増の20.0百万ヘクタールとなる見込み。生産量予測は発表していない。

報道(2015.3.11)によれば、アルゼンチン農家は2015年3月11日から販売拒否のストを開始した。同国農家は高水準の輸出税や、とうもろこしなど穀物の輸出制限に代表される現政権の農業政策に強い不満を抱いている事が背景。ただし、大豆の輸出については、豊富な在庫量から影響は限られるとの見方が強い。

【我が国の輸入先国シェア2位（2013年数量ベース 23.5%）
世界の生産量シェア 2位（2014/15年度 30.0%）
輸出量シェア 2位（2014/15年度 39.2%）】

表－3 ブラジルの大豆需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はCONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	82.0	86.7	94.5 (93.3)	-	9.0	
消 費 量	38.2	39.3	40.8 (44.2)	-	3.7	
うち搾油用	35.2	36.3	37.6 (…)	-	3.6	
輸 出 量	41.9	46.8	46.0 (46.8)	-	▲ 1.8	
輸 入 量	0.4	0.6	0.3 (0.5)	▲ 0.3	▲ 50.8	
期末在庫量	15.3	16.5	24.6 (4.8)	▲ 0.3	48.7	
期末在庫率	19.1%	19.2%	28.3% (5.2%)	▲ 0.3	9.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.70	30.10	31.50 (31.33)	-	4.7	
単収(t/ha)	2.96	2.88	3.00 (2.98)	-	4.2	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
CONAB「Acompanhamento da Safra Brasileira de Grãos」(10 March 2015)

【世界の生産量シェア 3位（2014/15年度 17.8%）
輸出量シェア 3位（2014/15年度 6.8%）】

表－4 アルゼンチンの大豆需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、()はOil.W	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	49.3	54.0	56.0 (56.0)	-	3.7	
消 費 量	36.1	39.0	42.3 (…)	-	8.5	
うち搾油用	33.6	36.2	39.2 (39.7)	-	8.3	
輸 出 量	7.7	7.8	8.0 (7.8)	-	2.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	0.0	
期末在庫量	21.8	29.0	34.7 (32.6)	-	19.7	
期末在庫率	49.8%	62.0%	69.1% (…)	-	7.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.40	19.80	19.80 (20.00)	▲ 0.20	0.0	
単収(t/ha)	2.54	2.73	2.83 (2.80)	0.03	3.7	

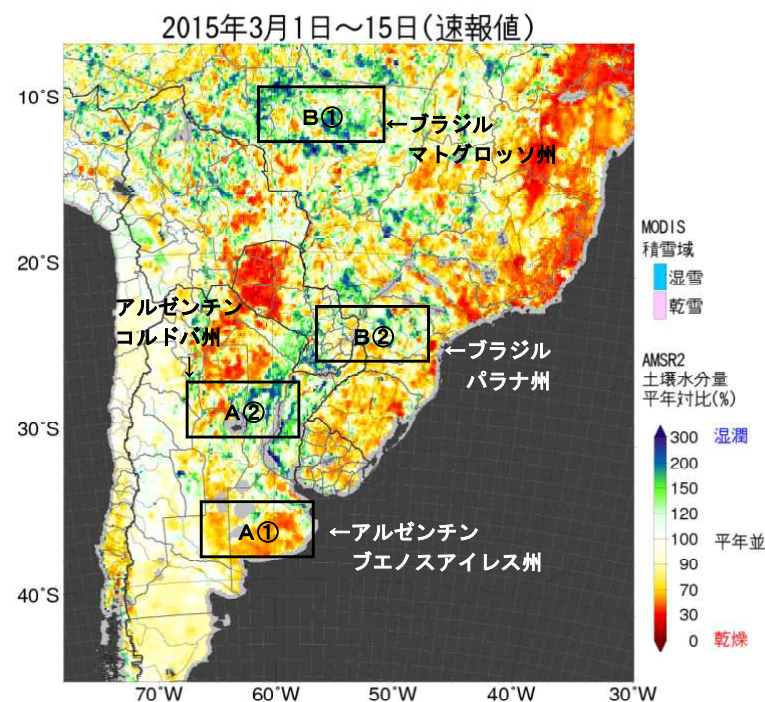
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
OIL WORLD「OIL WORLD Monthly」(20 February 2015)

【参考】南米の土壌水分量の推移と生育の動向

ブラジルの大豆産地では、2014/15年度の作付作業は2014年9月中旬から開始された。中西部マトグロッソ州では、10月初旬より乾燥型の天候が続き作付作業が遅れ、11月後半から2015年1月にかけても乾燥型の天候が続き作柄が悪化した。その後は降雨に恵まれ、3月6日現在の収穫進捗率は67%と、平年並みとなっている。南部パラナ州でも、乾燥型の天候により作付作業に遅れが生じたが、その後は降雨に恵まれ、収穫進捗率は39%と依然として平年より遅延しているが、作柄は極めて良好となっている。(図-2、3、4)

アルゼンチンの大豆産地では、2014/15年度の作付作業は好天に恵まれた2014年10月中旬から開始された。ブエノスアイレス州では12月の降雨により、一部で土壌水分過多の地域がみられた一方、コルドバ州等では土壌水分不足となった。2015年1月からは定期的な降雨に恵まれ、作物は順調に生育したものの、コルドバ州では2～3月上旬の多雨により洪水が発生し、作柄の悪化が懸念される。ブエノスアイレス州では乾燥により単収が低下する見込みである。(図-2、5、6)

図-2 南米(ブラジル・アルゼンチン)の土壌水分量平年対比



資料: JAXA提供の「AMSR2土壌水分プロダクト」を農林水産省にて加工

図-3 B①ブラジル中西部 マトグロッソ州

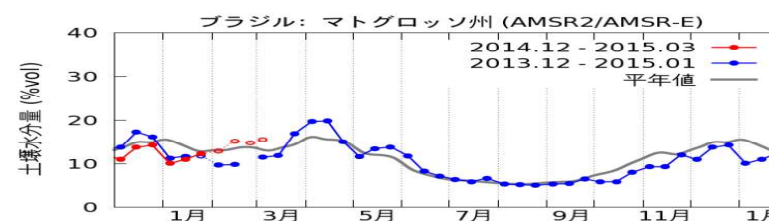


図-4 B②ブラジル南部 パラナ州

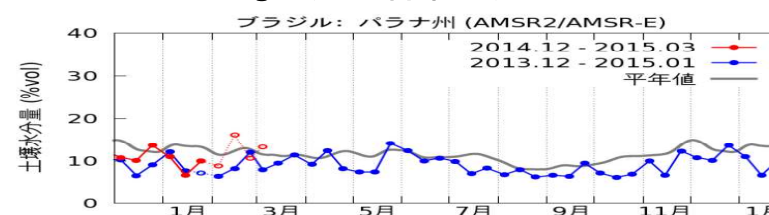


図-5 A①アルゼンチン ブエノスアイレス州

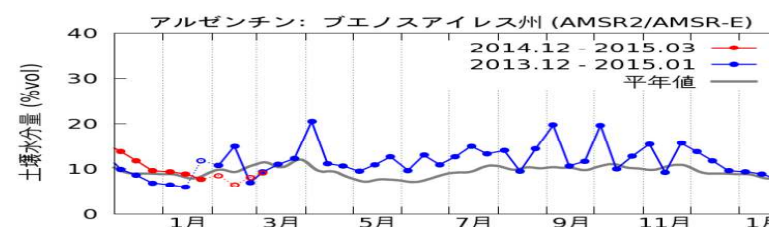
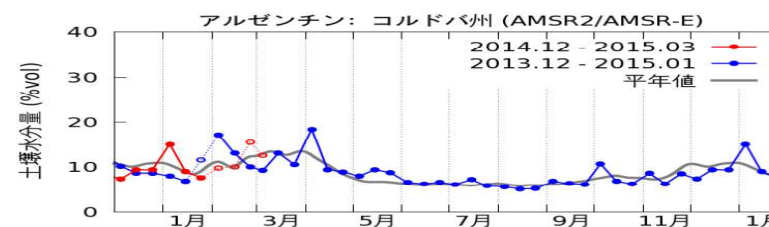


図-6 A②アルゼンチン コルドバ州



資料: JAXA提供の「AMSR2土壌水分プロダクト」

注: 点線及び白丸は、統計の対象となる資料が速報版であるか、資料の一部が許容する範囲内で欠けている場合を意味する。

エ パラグアイ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、8.5百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、3.7百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度並みの、4.8百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、ほぼ前年度並み、期末在庫率は1.1%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の輸出量で上方修正、消費量、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の輸出量で上方修正、消費量、輸入量で下方修正された。結果として期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)パラグアイ駐在農務官報告(2015.2.13)によれば、2015/16年度の大豆の生産量は、今年度(8.5百万トン)を8.2%上回る9.2百万トンとなる見込み。これは、二期作大豆の作付面積の増加が見込まれ、次年度の作付面積が今年度(3.3百万ヘクタール)を9.1%上回り、3.6百万ヘクタールとなると見込まれるため。生産量の増加に伴い、次年度の搾油量は今年度より9.5%増加し、4.6百万トンとなる見込み。

オ カナダ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、6.1百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、2.3百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、3.7百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も11.0%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

カナダ農務農産食品省「Outlook for principal field crops」(2015.2.17)によれば、2014/15年度の大豆の生産量は、前年度(5.4百万トン)より13%増加し、史上最高の6.0百万トンとなる見込み。これは、単収は2.71トン/ヘクタールと前年度(2.88トン/ヘクタール)より低下するものの、収穫面積が2.24百万ヘクタールと前年度(1.86百万ヘクタール)を大幅に上回ることによる。

2015/16年度の大豆の生産量は、今年度より10%増加し6.7百万トンとなる見込み。これは、他の穀物に比べ大豆が価格優位にあること及び比較的単収が安定していることから、作付面積が今年度を4%上回り2.35百万ヘクタールと史上最高を記録するとの見通しによる。

（世界の生産量シェア 6位（2014/15年度 2.7%）
輸出量シェア 4位（2014/15年度 4.1%））

表－5 パラグアイの大豆需給（市場年度：3月～翌年2月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、〇はOil.W	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	8.2	8.2	8.5 (8.8)	－	3.7
消 費 量	3.1	3.5	3.7 (…)	▲ 0.1	7.2
うち搾油用	3.0	3.4	3.6 (…)	－	7.5
輸 出 量	5.5	4.8	4.8 (…)	0.3	0.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	▲ 0.0	42.9
期末在庫量	0.1	0.1	0.1 (…)	▲ 0.4	11.9
期末在庫率	1.5%	1.0%	1.1% (…)	▲ 4.3	0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	3.16	3.20	3.30 (3.60)	－	3.1
単収(t/ha)	2.60	2.56	2.58 (2.43)	－	0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
OIL WORLD「OIL WORLD Monthly」(20 February 2015)

（我が国の輸入先国シェア 3位（2013年数量ベース 13.7%）
世界の生産量シェア 7位（2014/15年度 1.9%）
輸出量シェア 5位（2014/15年度 3.2%））

表－6 カナダの大豆需給（市場年度：8月～翌年7月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、〇はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	5.1	5.4	6.1 (6.0)	－	12.9
消 費 量	1.9	2.1	2.3 (2.1)	－	7.1
うち搾油用	1.6	1.5	1.7 (…)	－	9.0
輸 出 量	3.5	3.5	3.7 (4.3)	－	6.6
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.4)	－	▲ 11.8
期末在庫量	0.2	0.3	0.7 (0.3)	－	133.0
期末在庫率	3.3%	5.0%	11.0% (4.3%)	－	6.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.68	1.86	2.24 (2.24)	－	20.4
単収(t/ha)	3.03	2.88	2.71 (2.71)	－	▲ 5.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(17 February 2015)

カ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、12.4百万トンとなる見込み。

消費量は、堅調な搾油需要から前年度より増加し、86.2百万トンの見込み。

輸入量は、消費量の増加から前年度より増加し、74.0百万トンの見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も16.6%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、輸出量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

中国では、例年4月初旬から5月下旬にかけて作付けが行われ、9月初旬から10月下旬にかけて収穫が行われる。2014/15年度の収穫は終了した。

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」によれば、2014/15年度の実産量は、11.8百万トンと前年度(12.0百万トン)より1.3%減少する見込み。これは、主産地の黒竜江省の単収は良好であるものの、華北平原を襲った夏の干ばつが大きく単収を押し下げたことによる。2014/15年度の実付面積は、6.6百万ヘクタールの見込みであり、これは5年前の3分の2の水準。本来、黒竜江省及び内モンゴル自治区は、中国の大豆生産量の約半分を占める主産地だったが、とうもろこし及び米の作付けの増加に伴い、大豆の実付面積は近年著しく減少している。

【貿易情報・その他】

2015年2月2日、中国農業政策の指針となる「中央一号文件」が公表された。

中国政府は、前年より国産大豆と綿花の高値買取りによる保護政策(国家備蓄制度)を廃止し、代わって農家に対する補助金の直接払い制度を採用している。これは、東北地域の黒竜江省、吉林省、遼寧省、内モンゴル自治区を対象に、大豆の目標価格を設定し、市場価格がこれを下回った場合は、農家にその差額を補助金として直接給付するというもの。中国国家発展改革委員会(NDRC)は、2014年5月18日、1トン当たり4,800元(9万1,200円)の目標価格を導入し、国内大豆相場の安定化と農家の作付意欲の向上を図る旨発表した。

鄭州穀物卸売市場「中国穀物市場2015年1月分析報告」(2015.2.4)は、農産物の価格形成のメカニズムを整備することで、農民の収入を増加させ、農産物の適正水準を維持する必要性を強調、大豆については、補助金制度の整備が重要であり、特に、目標価格制度の運用に関しては、農家に対して補助金がしっかりと支給されていないという課題があり、改善の余地があると指摘。

中国通関(海関)統計によれば、2015年2月の輸入量は、前年同月比11.3%減の4.3百万トンとなった。国別には、米国4.0百万トン(シェア94.0%)、カナダ0.2百万トン(同4.4%)。また、2015年1～2月の累計輸入量は、前年同期比3.9%増の11.1百万トンとなった。国別には、米国10.7百万トン(同95.6%)、カナダ0.3百万トン(同3.1%)、ブラジル0.3百万トン(同0.3%)。

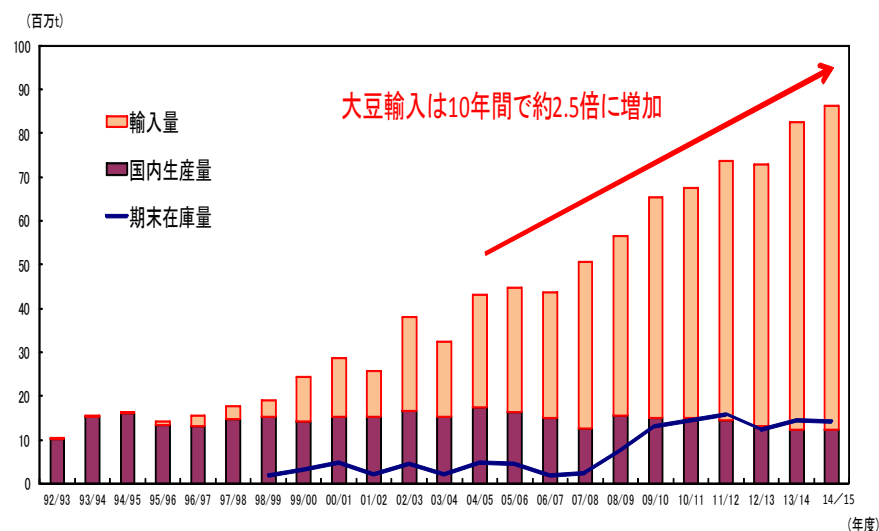
世界の生産量シェア 4位 (2014/15年度 3.9%)
輸入量シェア 1位 (2014/15年度 64.9%)

表ー7 中国の大豆需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、0はOil.W	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	13.1	12.2	12.4 (12.0)	-	1.2	
消 費 量	76.2	80.3	86.2 (…)	-	7.3	
うち搾油用	65.0	68.9	74.5 (67.5)	-	8.2	
輸 出 量	0.3	0.2	0.3 (…)	▲ 0.1	13.6	
輸 入 量	59.9	70.4	74.0 (7.6)	-	5.2	
期末在庫量	12.4	14.4	14.3 (…)	0.1	▲ 0.7	
期末在庫率	16.2%	17.9%	16.6% (…)	0.1	▲ 1.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.17	6.85	6.80 (6.67)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	1.82	1.78	1.82 (1.80)	-	2.2	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
OIL WORLD「OIL WORLD Monthly」(20 February 2015)

図ー7 中国の大豆の生産量と輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2015.3)をもとに農林水産省で作成

2 なたね

(1) 国際的ななたね需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省 (USDA) の見通し>

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

生産量は、カナダ、豪州、インド等で減少するものの、EU、中国、ロシアで増加することから、世界全体では前年度を上回り71.3百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、豪州で上方修正された。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

消費量は、中国、インドで減少するものの、EU、カナダ、米国等で増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り70.7百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、中国で上方修正された。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑

世界全体の貿易量は、前年度より減少し、13.9百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、EU等で増加し、カナダ、豪州等で減少する見込み。

輸入国では、パキスタン等で増加し、中国、EU等で減少する見込み。

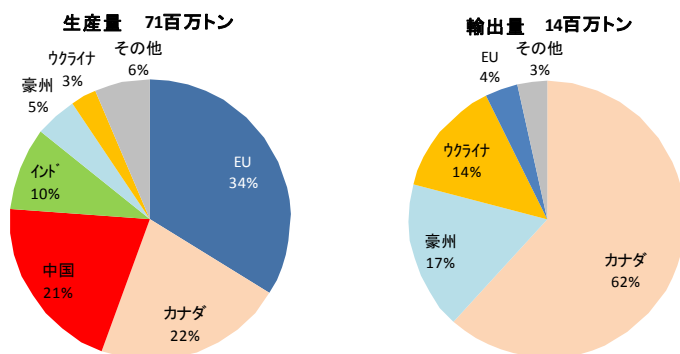
なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、輸出国では豪州で上方修正、輸入国では中国で上方修正された。

【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体で7.2百万トンとなる見込み。国別には、カナダ、インド等で在庫が取り崩されるものの、EU、豪州等で積み増しされる見込み。期末在庫率は10.2%と前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体でわずかに上方修正され、国別には、豪州でわずかに上方修正された。

図－1 世界のなたねのシェア (2014/15年度)



表－1 世界のなたね需給（米国農務省）

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	63.8	71.2	71.3	0.1	0.2
EU	19.6	21.1	24.1	-	14.1
カナダ	13.9	18.0	15.6	-	▲ 13.4
中国	14.0	14.5	14.7	-	1.7
インド	6.8	7.3	6.9	-	▲ 6.2
豪州	4.1	3.8	3.4	0.1	▲ 10.1
ウクライナ	1.3	2.4	2.2	-	▲ 6.5
ロシア	1.0	1.4	1.5	-	4.4
消 費 量	65.4	69.4	70.7	0.1	1.9
うち搾油用	62.4	66.4	67.7	0.1	2.0
EU	23.4	24.9	25.8	-	3.7
中国	17.6	19.1	18.6	0.1	▲ 2.9
カナダ	7.0	7.1	7.3	-	3.6
インド	7.0	7.4	7.1	-	▲ 4.1
日本	2.4	2.4	2.5	-	3.4
米国	1.3	1.7	1.9	-	7.1
メキシコ	1.4	1.5	1.5	-	2.8
貿 易 量	12.5	15.1	13.9	0.1	▲ 7.9
(輸出)					
カナダ	7.1	9.2	8.6	-	▲ 6.2
豪州	3.7	2.9	2.4	0.1	▲ 17.2
ウクライナ	1.3	2.2	1.9	-	▲ 15.3
EU	0.1	0.3	0.5	-	82.8
米国	0.2	0.2	0.1	-	▲ 13.9
ロシア	0.0	0.2	0.2	-	1.2
(輸入)					
中国	3.4	5.0	3.9	0.1	▲ 23.7
EU	3.4	3.5	2.9	-	▲ 15.9
日本	2.5	2.4	2.5	-	3.0
メキシコ	1.4	1.5	1.5	-	2.8
パキスタン	0.6	0.6	0.9	-	41.7
アラブ首長国連邦	0.6	0.7	0.8	-	14.3
米国	0.4	0.9	0.8	-	▲ 10.1
期末在庫量	5.1	6.7	7.2	0.0	7.7
カナダ	0.6	2.4	2.1	-	▲ 12.0
EU	2.6	2.0	2.6	-	33.5
中国	0.6	1.0	1.0	-	0.0
インド	0.6	0.5	0.3	-	▲ 38.5
豪州	0.3	0.4	0.6	0.0	47.5
米国	0.1	0.1	0.1	-	▲ 8.5
日本	0.1	0.1	0.1	-	▲ 3.5
期末在庫率	7.8%	9.7%	10.2%	0.0	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」(10 March 2015)

(2) なたねの主要生産・輸出国等の需給状況

ア カナダ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、15.6百万トンとなる見込み。
消費量は、前年度より増加し、7.3百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より減少し、8.6百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も13.0%に低下する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作物】

2014/15年度の生産量は、15.6百万トンと前年度に次ぎ史上2番目の見込み。
作付作業の遅れに加え、2014年9月半ばの降雪を伴う冷涼湿潤型の天候により収穫作業に遅れが生じたが、9月下旬以降、温暖乾燥型の天候に転じ収穫作業が進捗、10月末、主要産地の収穫作業はほぼ終了した。なお、生育及び収穫期間中に続いた冷涼湿潤型の天候により、単収は前年度に比べ大幅に低下する見込み。
カナダ農務農産食品省「Outlook for principal field crops」(2015.2.17)によれば、2015/16年度の生産量は、前年度に比べ3%増加し16.0百万トンとなる見込み。これは、カナダ西部の他の作物に比べなたねの収益性が高いことから、作付面積が2%増加すると見込まれるため。

イ 豪州

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、3.4百万トンとなる見込み。
消費量は、ほぼ前年度並みの、0.8百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より減少し、2.4百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も17.6%に上昇する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は、生産量、輸出量で上方修正された。結果として、期末在庫量がわずかに上方修正された。

【生育進捗状況及び作物】

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、2014/15年度の生産量は、前年度を9%下回り、3.4百万トンとなる見込み。これは、収穫面積は前年度より2%増加するものの、特に東部地域で生育に不適な天候に見舞われ、単収が低下すると見込まれるため。

我が国の輸入先国シェア 1位 (2013年数量ベース 93.8%)
世界の生産量シェア 2位 (2014/15年度 21.8%)
輸出量シェア 1位 (2014/15年度 61.8%)

表-2 カナダのなたね需給（市場年度：8月～翌年7月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	13.9	18.0	15.6 (15.6)	-	▲ 13.4
消 費 量	7.0	7.1	7.3 (7.4)	-	3.6
うち搾油用	6.7	7.0	7.2 (…)	-	3.2
輸 出 量	7.1	9.2	8.6 (9.2)	-	▲ 6.2
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	51.5
期末在庫量	0.6	2.4	2.1 (1.5)	-	▲ 12.0
期末在庫率	4.2%	14.5%	13.0% (8.7%)	-	▲ 1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	8.80	8.01	8.08 (8.08)	-	0.9
単収(t/ha)	1.58	2.24	1.93 (1.93)	-	▲ 13.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(17 February 2015)

我が国の輸入先国シェア 2位 (2013年数量ベース 6.2%)
世界の生産量シェア 5位 (2014/15年度 4.8%)
輸出量シェア 2位 (2014/15年度 17.2%)

表-3 豪州のなたね需給（市場年度：12月～翌年11月）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	4.1	3.8	3.4 (3.4)	0.1	▲ 10.1
消 費 量	0.7	0.8	0.8 (…)	-	3.9
うち搾油用	0.7	0.8	0.8 (…)	-	6.7
輸 出 量	3.7	2.9	2.4 (2.4)	0.1	▲ 17.2
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	0.0
期末在庫量	0.3	0.4	0.6 (…)	0.0	47.5
期末在庫率	6.5%	10.4%	17.6% (…)	0.3	7.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	3.27	2.65	2.71 (2.71)	0.01	2.3
単収(t/ha)	1.27	1.43	1.26 (1.26)	0.04	▲ 11.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
ABARES「Agricultural commodities」(3 March 2015)(※ABARESは作付面積)

ウ ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、2.2百万トンとなる見込み。

消費量は、ほぼ前年度並みの、0.2百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、1.9百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も9.8%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、2015/16年度のなたねの生産量は1.9百万トンと、豊作だった前年度(2.2百万トン)を17.6%下回る見込み。これは、不十分な積雪(スノーカバー)にもかかわらず、なんとか冬を乗り切ったものの、経済・財政上の制約から高品質な肥料等の投入が減少し、単収が低下すると見込まれるため。2015年2月中旬時点で、生育不良の状態にあるものが20%と(前年同期:5%)、歴史的にも低い水準となっており、今後の作柄が懸念される。

エ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、24.1百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、25.8百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、2.9百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も10.0%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.2.26)によれば、2015/16年度の作付面積は、なたね価格の低迷に伴い農家の採算が悪化することから、前年度(6.8百万ヘクタール)を3.6%下回り6.5百万ヘクタールとなり、生産量は前年度(24.1百万トン)を11.7%下回り21.2百万トンとなる見込み。作物はフランスを含む多くの地域で概ね順調に生育しているが、ネオニコチノイド系殺虫剤の使用禁止により、特にドイツ及び英国で、病害虫による被害が報告されている。

〔世界の生産量シェア 6位(2014/15年度 3.1%)
輸出量シェア 3位(2014/15年度 13.7%)〕

表-4 ウクライナのなたね需給(市場年度:7月~翌年6月)
(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、0はOil.W	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1.3	2.4	2.2 (2.4)	-	▲ 6.5
消 費 量	0.0	0.2	0.2 (…)	-	▲ 1.3
うち搾油用	0.0	0.2	0.2 (…)	-	▲ 1.3
輸 出 量	1.3	2.2	1.9 (1.9)	-	▲ 15.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (…)	-	50.0
期末在庫量	0.1	0.1	0.2 (…)	-	288.5
期末在庫率	7.5%	2.2%	9.8% (…)	-	7.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	0.55	1.00	0.88 (0.92)	-	▲ 12.0
単収(t/ha)	2.38	2.36	2.50 (2.55)	-	5.9

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
OIL WORLD「OIL WORLD Monthly」(20 February 2015)

〔世界の生産量シェア 1位(2014/15年度 33.8%)
輸入量シェア 2位(2014/15年度 21.3%)〕

表-5 EUのなたね需給(市場年度:7月~翌年6月)
(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、0はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	21.1	24.1 (24.1)	-	14.1
消 費 量	23.4	24.9	25.8 (25.7)	-	3.7
うち搾油用	22.5	23.9	24.7 (24.8)	-	3.2
輸 出 量	0.1	0.3	0.5 (0.6)	-	82.8
輸 入 量	3.4	3.5	2.9 (2.9)	-	▲ 15.9
期末在庫量	2.6	2.0	2.6 (2.0)	-	33.5
期末在庫率	10.9%	7.8%	10.0% (7.6%)	-	2.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	6.33	6.75	6.77 (6.79)	-	0.3
単収(t/ha)	3.10	3.13	3.55 (3.50)	-	13.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 March 2015)
EU「Balance sheets for cereals, oilseeds and rice」(26 February 2015)

オ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積が減少するものの、単収が上昇することから前年度より増加し、史上最高の14.7百万トンとなる見込み。

消費量は、搾油用需要が減少することから前年度より減少し、18.6百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、3.9百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度並み、期末在庫率は5.6%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、消費量、輸入量で上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度のなたねは、2014年5月末までに収穫作業を終了した。収穫面積は7.5百万ヘクタールと、史上最高の前年度より0.4%減少するものの史上2番目の水準であり、単収は1.96トン/ヘクタールと、前年度より2.1%上昇し史上最高が見込まれることから、生産量は、史上最高の14.7百万トンとなる見込み。

2015/16年度のなたねは、2015年3月上旬現在、揚子江中・下流域以北で抽苔（ちゅうだい）期（花茎が伸びだす頃）にある。揚子江中・下流域以南及び西南地区（チベット自治区、雲南省、四川省、重慶）の大部分では開花期にある。

【貿易情報】

中国通関（海関）統計によれば、2015年2月の輸入量は、前年同月比30.4%減の30.0万トンとなった。国別の輸入先は、カナダが12.5万トンと全体の42.0%を、豪州が15.9万トンと53.5%を占めた。また、2015年1～2月までの累計輸入量は、前年同期比37.2%減の63.5万トンとなった。国別には、カナダが35.6万トンと全体の56.1%を、豪州が24.3万トンと38.3%を占めた。

【その他】

2015年2月2日、中国農業政策の指針となる「中央一号文件」が公表された。中国国務院（2015.2.4）によれば、同国ではこれまで農家支援の観点より高値での買上げを継続してきた影響から農家の過剰生産を招いた他、割安の外国産の輸入が増加したため、国家備蓄が大量に積み上がる問題を抱えており、この状況を改善する手段として、目標価格制度の導入により市場の需給による価格形成メカニズムの促進を目指すとしている（⇒とうもろこし、大豆の中国【その他】の項も参照）。とうもろこし、なたね、砂糖については、引き続き臨時買上げ・備蓄政策が実施されており、同国政府は、なたねの生産を促進するため、最低価格保証と、耕作面積に応じた直接補助金の支給を行っている。なたねの買上価格の下限は1トン当たり5,100元（9万6,900円）となっており、種子の購入補助金は1ヘクタール当たり150元（2,850円）となっている。

〔 世界の生産量シェア 3位（2014/15年度 20.6%）
輸入量シェア 1位（2014/15年度 27.9%） 〕

表－6 中国のなたね需給（市場年度：10月～翌年9月）

（単位：百万トン）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、0はOil.W	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	14.0	14.5	14.7 (11.2)	-	1.7
消 費 量	17.6	19.1	18.6 (…)	0.1	▲ 2.9
うち搾油用	17.0	18.5	18.0 (15.1)	0.1	▲ 3.0
輸 出 量	…	…	… (…)	…	…
輸 入 量	3.4	5.0	3.9 (4.6)	0.1	▲ 23.7
期末在庫量	0.6	1.0	1.0 (…)	-	0.0
期末在庫率	3.6%	5.4%	5.6% (…)	▲ 0.0	0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.43	7.53	7.50 (6.45)	-	▲ 0.4
単収(t/ha)	1.88	1.92	1.96 (1.74)	-	2.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Oilseeds: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」 (10 March 2015)
OIL WORLD 「OIL WORLD Monthly」 (20 February 2015)

写真 中国安徽（あんき）省 抽苔始期のなたね（2015年3月16日撮影）



写真：I C N e t（株）

今月のトピックス

【ブラジルのバイオエタノールの現状と見通し】

地球温暖化の防止や、循環型社会の形成などの観点から、近年、日本でもバイオエネルギーという再生可能エネルギーに注目が集まっている。ブラジルでは、古くからサトウキビを原料としたバイオエタノールの生産拡大、需要促進に取り組んでおり、長期にわたる取り組みの結果、現在、世界有数のバイオエタノール大国となった。

1 バイオマスエネルギーとバイオエタノール

バイオマスは「太陽エネルギーを貯えた生物体」を意味する用語である。簡単には樹木や草などの生物体を作っている有機物をエネルギー源として利用するのが「バイオマスエネルギー」である。そういった意味では、薪や木炭、畜産の糞など燃やしてエネルギーとして使っても、バイオマスエネルギーとなり、このような従来型のものは現在でも途上国で多く利用されている。これに対し、「バイオエタノール」は、サトウキビやとうもろこし、コメ等の糖質又はデンプン質作物を原料に、これらを発酵させ濃度99.5%以上の無水エタノールにまで蒸留して作られる新型バイオマスエネルギーである。

2 世界のバイオエタノール生産

世界のバイオエタノールの生産量は、2005年の461億リットルから2014年には1,159億リットルと、10年間で2.5倍に増加している。2014年現在、世界最大のバイオエタノール生産国は米国で、世界のバイオエタノール生産量の50%を占め、次いでブラジルが26%と、米国とブラジルの2国で世界全体のバイオエタノール生産量の75%を占めている。ここで言う「バイオエタノール」とは、米国では主としてとうもろこしを原料として生産されており、ブラジルではサトウキビを原料として生産されている。

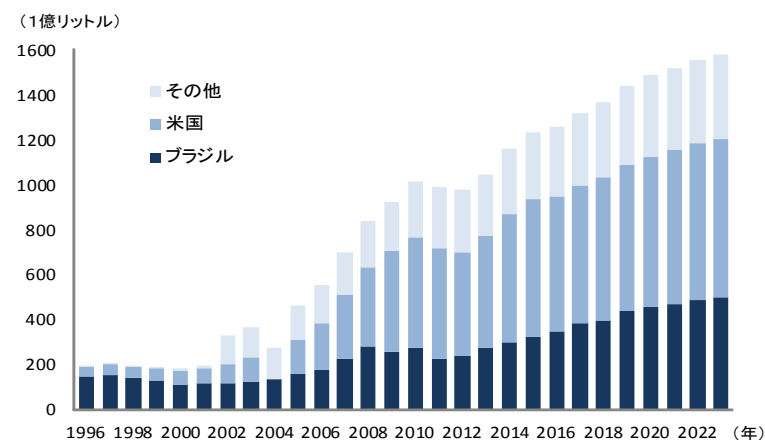
OECD-FAO「Agricultural Outlook 2014-2023」によれば、今後10年で、世界のバイオエタノールの生産量はますます増加し、2023年には1,580億リットルに達すると予測している。

3 ブラジルのサトウキビ生産

ブラジルのサトウキビの生産量は、2005年の423百万トンから2014年には734百万トンと、10年間で1.7倍に増加している。そのうち、バイオエタノール向けのサトウキビは、2005年の165百万トンから2015年には330百万トンと、2.0倍に増加している。2014年現在、バイオエタノール向けサトウキビは、サトウキビの全生産量の45%を占めている。

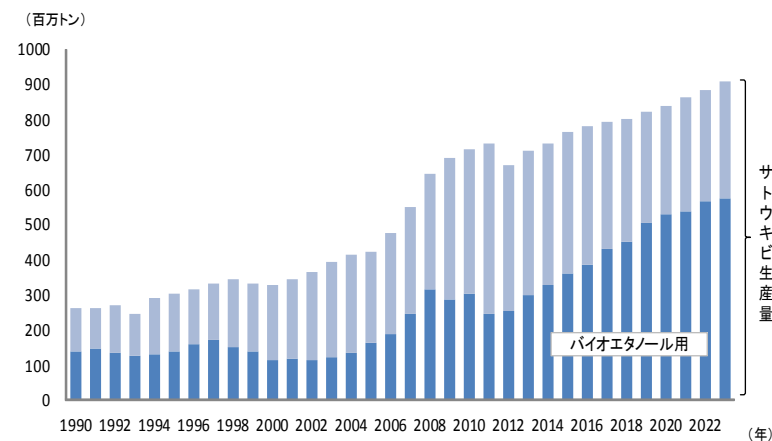
OECD-FAO「Agricultural Outlook 2014-2023」によれば、今後10年で、その比率はますます高まり、2023年には、ブラジルのバイオエタノール向けサトウキビは、サトウキビの全生産量の63%を占めると予測している。

図-1 世界のバイオエタノール生産量の推移及び予測



資料：OECD-FAO「Agricultural Outlook 2014-2023」

注：2013年以降は予測値



資料：OECD-FAO「Agricultural Outlook 2014-2023」

注：2013年以降は予測値

4 ブラジルのバイオエタノール政策

ブラジルのバイオエタノール政策の歴史は長く、日本では戦前に当たる1930年代、ガソリンへのバイオエタノール混合（5%）の義務付けを行ったのが最初である。当時は、砂糖市場の価格対策の一環として実施された。そして、1975年、ブラジル政府は「国家アルコール計画（PRO-ALCOOL）」を発表した。1970年代といえば、第1次オイルショックにより、国際原油価格が高騰した時期である。当時、ブラジルは国内原油需要の約8割を輸入に依存しており、ブラジル経済は大きな打撃を被ったのである。政府は、原油輸入を抑制し、ガソリンの代替燃料として、サトウキビから生産されるバイオエタノールの生産拡大及び需要促進を国策として推進した。生産者買入価格及び小売価格の補償、新規増設工場への低利融資、国営石油企業（ペトロブラス社）へのバイオエタノール販売独占権の付与等が実施された。「国家アルコール計画」は1990年に終了し、長期にわたって実施された生産・流通に関する政府の規制の多くは撤廃されたが、ブラジルは「国家アルコール計画」の当初の政策目的である石油の自給を、2006年に達成した。

5 バイオエタノール混合ガソリンとフレックス車の普及

ブラジル政府は、砂糖とバイオエタノールの需給動向等を勘案し、ガソリンへのバイオエタノール混合割合を設定している。ユーザーは、ガソリンスタンドへ行くと、バイオエタノール100%ガソリンか、バイオエタノール27%混合ガソリンか、どちらかを選ぶことになる。エタノール100%ガソリンの燃費は普通のガソリンの約7割であるため、ユーザーは、エタノール100%ガソリンの値段が、27%混合ガソリンの値段の7割以下ならエタノール100%を選び、7割以上なら27%混合ガソリンを選ぶ傾向にある。

ブラジルのバイオエタノール消費が急激に増加するきっかけとなったのは、2003年4月、フォルクスワーゲン社が、ガソリンやエタノール100%はもちろん、エタノールをどんな割合で混ぜたガソリンでも走れる「フレックス車」を発売し、爆発的な人気を博したことによる。現在、ブラジルの新車販売台数の90%以上がフレックス車となっており、日本メーカーも4社がフレックス車を現地生産している。

6 結び

地球温暖化の防止や、循環型社会の形成などの観点から、近年、日本でもバイオエネルギーという再生可能エネルギーに注目が集まっている。今後、日本が再生可能エネルギーの普及に取り組んでいく際、ブラジルと日本では、めぐる事情に大きな違いがあるものの、ブラジルのバイオエネルギー政策から学ぶべき点もあるのではなかろうか。

写真-1, 2 首都ブラジリアのガソリンスタンド



写真-3 フレックス車のマーク

